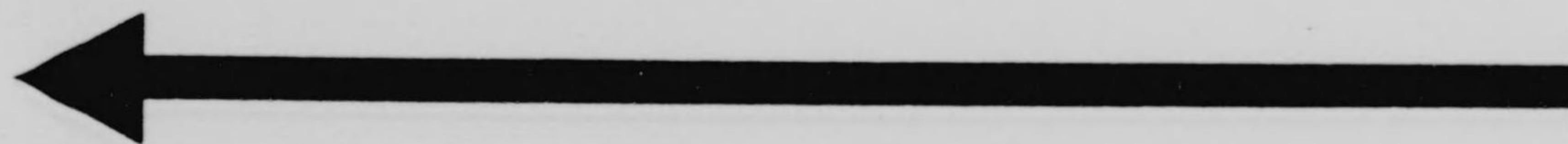


357

234



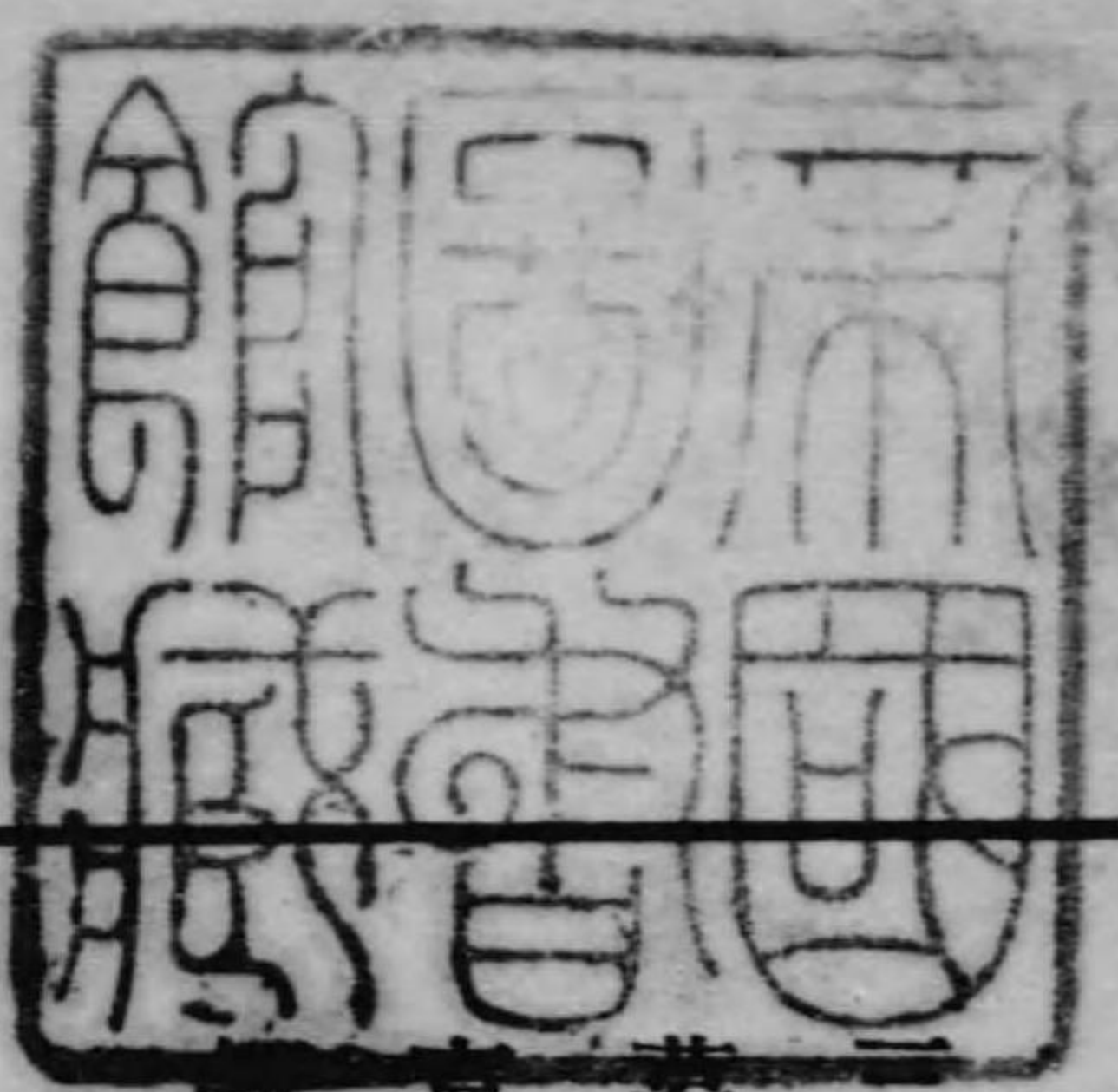
始



**THE PLAYBOY  
OF THE  
WESTERN WORLD**

BY JOHN M. SYNGE  
TRANSLATED BY M. M

357-234



三幕喜劇

のもらづたい

作原グンシ

譯子ねみ村松

年七一九一

譯者  
寄贈本



### 序に代へて

口上で申します。

たび／＼お手馴れの愛蘭土物の事とて、更にあふなげなく、詢に面白く拜見いたしました。讀みにく、譯しにくい筈の原文が、お譯によると、何の凝滞もなく、晦澁もなく、さら／＼と理解もされ、同情もされ、ところ／＼は、これは、つい此頃、東京近在で起つた事ではないかとさへも思はれます。方言本位の、異國情調の原作を、これほどまでにおこなしなされた御苦心の程をお察し申します。殊に、平素上品な言葉づかひばかりを主となされる御婦人のお筆で、下等社會の口吻や情味を、これほどまでにお寫しなされたは、竝大抵のお骨折で

はなかつたこと、感服いたしました。

併し、かうばかりでは、どうやらお座なりを申してゐるやうにも聞えませうから、少々ばかり贅澤を申して見ませう。これは、御婦人に對しては、全く無理な注文ですが、——若し勝手な望みをお許しなされますならば——實は、もつとずつと方言本位に譯していたゞきたかつたと申したのであります。お譯に何等かの弱點があるとする、此方言本位でなかつたといふ事が、恐らくは其主要なるものであらうと思ひます。原作者は「わしは愛蘭土の田舎の者が實際用ひてゐない言葉は、たつた一語か二語ぐらゐしか使はなかつた」と此作の序文で斷つてゐます通り、それほど田舎訛りに重きを置いてゐたのだと考へますと、お譯の調子は、まだ大分上品過ぎ、氣が利き過ぎ、どちらかといふと東京情調に近く、何となく場ちがひのやうにも感ぜられます。けれども、これは勿

論、榮耀の餘りに過ぎません。

次に——これは、私自身もかゝりあひの有ることですが——「いたづらもの」といふ外題のお譯です。

“Playboy” といふ言葉は、いろ／＼複雑な意味を含んでゐるから、容易には譯されないとか、逆も簡單明瞭には言ひ現はせないとかいふのが、我翻譯文壇の通説のやうですが、果してさうでせうか？ 私は、さういふ説を、甚だ不思議なやうに思ひます。彼の机上劇又は書齋劇などと評される唯の讀み物としての劇ならば知らぬこと、苟も實演を目的とする脚本が、含糊曖昧な、容易に解らんやうな外題を附けて、平氣で賣物にしてゐるとは、妙なことです。最も解り易い、耳立ち易い、引力の強い、派手な名目を選ぶのが、古今内外ともに、作者や興行者の秘訣ではありませんか？ 成程、場合によつては、うま／＼譯さ

れないことはありません。けれども意義の確定されない筈はなからうぢやありませんか？ 私は、此劇の作者を、それほど脚本の實際に疎かつた人とは信じかねます。

私は嘗て、此外題を「西海岸の悪太郎」と譯しました。これはライトの方言辭典に、Playboy を Devil と譯してあつたのに據つたのです。即ち悪太郎とは——あなたが御推察なされたやうに「頑童」の義ではなく——「悪源太」、「悪七兵衛」、「悪禪師」の悪で、即ち犇猛或は暴勇の義です。蓋し「悪」の字は、昔は、叔父殺しや親殺しなどを畏怖又は憎惡又は驚歎する餘りに、其呼名の上に附加する例であつたのですが、後には轉じて頑童の事をも悪太郎と呼ぶやうになつたのです。Playboy に、今日「いたづらもの」の義があるなら、それは恐らく、右と類似の進化からではありませんまいか？ それは兎も角もとして、内外共に、

残忍殺伐の餘風の尙全く滅し切らぬ時代などに在つては、尋常人のなし得ない残酷なことをした者を超人間として畏敬するは御熟知の風習です。今日でさへも甚しい強盗や人殺しは、或一部の者には崇められます。で、私は、彼の草双紙の黒雲太郎や雷太郎や坂東太郎や關東小六などを連想して「西國の鬼太郎」とか「西海岸の悪魔太郎」とかいふ風に譯したいと思つたのです。(即ちお譯の註解中に見えてゐる wild dare-devil といふのこそ最も正しい解釋だと信じます)。ところが、悪魔太郎では、あんまり草双紙めいて和臭が勝ち、鬼太郎では劇評家の岡君の戲號と衝くゆゑ、少々古風過ぎると思ひながら、當座用に「悪太郎」としておいたのです。今思へば「西海岸の鬼息子」とでもすればよかつたのです。

試に、マンセル會社版の原作に就いて Playboy といふ語及びそれに關係のある

語句の用ひてある箇所を調べて見ると、ざつと九ヶ所あるかと思ひます。第一が P. 55 の *the wonder of the western world*. 第二が P. 71 の *the walking playboy of the western world*. 第三が P. 93 の *the champion playboy of the western world*. 第四が P. 94 の *That's the playboy on the winckered mule*. 第五が P. 95 の *He's the champion of the world*. 第六が P. 98 の *that lad is the wonder of the western world*. 第七が P. 117 (群衆嘲弄の條下) の *There's the playboy! There's the lad thought he'd rule the roost in Mayo!* 第八が P. 119 の *he an ugly liar was playing off the hero and the fright of men*. 第九が大詰幕切のペギンの語 *I've lost the only playboy of the western world*. である。

ところで、右九ヶ所とも、明かに「恐怖すべき凡人以上の若い者」といふ義に解して少しも差支はないと思ひます。多義だの、複雑だのと、迷ふに及ばんと

思ひます。うつれも一樣に、「鬼のやうなきつゝい男」或は「悪魔のやうな偉い息子」即ち鬼息子と譯填して見てよくはまるぢやありませんか？ お註解の中に *devil* といふのは此語の古義だといふ説が引いてありましたが、原作者は、強ち時代を現代とはしてゐません。彼の「聖者の泉」同様、やゝ古代の事として寫してゐるのかも知れないとすると、尙更差支のないことになりませう。成程此語には、別に選手といふ意義もあります。併しそれは「屈指の勇者」「名代の傑物」即ち *champion* 又は代表的 *hero* などといふと同じく、むしろ後世の轉義でありませう。それに假に *playboy* を選手と譯したとすると、本文の *the champion playboy* は重語となります。私は、これは、例へば「鬼息子關」とか「鬼若衆の横綱」といふイキの歎美稱だらうと考へたのです。若し選手と譯すると、*walking playboy of the western world* の場合はどうなるでせう？ お譯には、此

walking といふ語が省かれてゐますが、何かお考へがあつて、わざとお捨てになつたのですか？ 私は、此 walking を彼の walking dictionary (活字引) のそれであらうかと獨斷して、現人神や活佛や人鬼などの例と同様に取扱つて、「活動してゐる鬼」「活動してゐる悪魔」といふ意味に取りたいと思つてゐました。

いづれにもせよ、playboy といふ語は、見物の心に驚異と畏怖と尊敬とを直覺的に——即ち具體的——に呼び起す力のあるものでなくては、此作意が振ひません。「選手」では抽象的に過ぎます。playboy の連想には、何等かの凄味又は荒唐味が伴はねばならぬやうに思ひます。といふのは、私は、愛蘭士民俗の遺傳性に今尙残忍や恠異や暴戻やを感賞歎美する空想癖の伏在してゐることを寫した點に、此作の一要旨が存してゐると考へざるを得ないからです。ついで長々しく無遠慮な評言を申し散らしましたが、右二ヶ條の外には、最早一

言も批議を試みますこともありません。まことに結構なお譯と存じます。序ながら、嘗て原書を走讀しました時には、半分疑問のまゝで讀過しました箇所も此お譯を引合せて、自然はつきりと解讀し、一段愉快を覺えました。こゝにお禮を申し添へておきます。

五月十五日

道 遙

松村みね子様



いたづらもの

いたづらもの

(空想の世に生きる人々)

人物

クリストファ・マホン。

老マホン、彼の父、家畜もち。

マイケル・ジエムス・フラアルテ、酒店の主人。

マアガレット・フラアルテ(俗稱ペギイン・マイケ)マイケルの娘。

シヨオン・ケオ、若き百姓、ペギインの従兄。

後家クイン、三十ぐらの女。

ファイリイ・カレン  
ジミイ・フアルル  
小百姓。

セイラ・タンセイ  
スウサン・ブラデイ  
村の娘たち。

アーナア・ブレイク

口上いひ。

百姓たち。

荒涼たるメヨの海岸の一農村の附近を舞臺とする。第一幕は或秋の晩、第二幕及び第三幕はその翌日。

### 第一幕



田舎の居酒屋、粗野にしてうすぎたい店。右に帳場らしい所あり、その上に棚があつて、壺やら瓶やら澤山載つてある、帳場に近く空樽がいくつもある。後方、帳場より少し左手に、外に出る月口あり、それより少し左に寄つて長椅子あり、その上に棚あり、其處にも瓶が並んでゐる。その側の窓の下にテーブルがある。左手に大きな爐あり、泥炭が燃えてゐる、その側に奥の部屋に行く小さい月口がある。  
二十歳ぐらゐの野暮らしいが美しい娘ヘギインがテーブルの上で何か書いてゐる。普通の百姓の娘の服装してゐる。  
ヘギイン。(書きながらゆつくりと讀む) 黄いろい上着を作る切地六ヤード。あみ上げの靴一足、踵高く、あなは眞鍮の金具。婚禮の席に相當の帽子一個。上等の齒みがき楊子。右の品々及び酒三樽、右をジエムス・フアルルテ宛に、ジミイ・フアルルの籃車にて、今度の市の前晩までにお届け下されたく、右御願ひ申

上候。マアガレット・フラアルテ。

四

(丁度自分の名前を書き終る時、屈つた髪の毛の黄い若者、シヨオン・ケオが道入つて来る。若者は嬬ひとりを見て、落ちつかない様子で室内を見廻す)

シヨオン。何處へ行つた?

ペギイン。(見かへりもしないで)今直つて歸つて来るよ。(手紙の上書きを書く)カツスルバア、酒商シイマス・ムルロイ殿。

シヨオン。(不安らしく)路ぢや見えなかつたつけ。

ペギイン。見えるわけではないよ。(切手を紙めて手紙にはりつける)こんな眞暗な晩だもの、それに日がくれて三十分も立つぢやないか。

シヨオン。(再び戸の方に向つて)おいら道入つてお前に會つてつて悪かあないか、寄らずに行かうかと思つて、よつほど長く外で考へてゐたんさ。(火の側に来る)

さうすると、夜がしいんとして、牛の奴らが大きな息をしたり溜息をついたりしてゐるんが、よく聞えて、橋から此處の家まで人つ子ひとり通らねえんさ。

ペギイン。(手紙を封じて)四つ角よりか先まで行つたんだらう、其處でファイリイ・カレンだの、ほかにも二三人の連中と一緒になつてケイト・カシデイさんのお通夜に行くつもりなのさ。

シヨオン。(びつくりして軋を見る)こんな眞つ暗らやみにそんな遠くまで行くんか? ペギイン。(じれつたさうに)さうさ、さうしてわたしはこんな山の麓にたつた一人でおいてさばりさ。(立ち上つて手紙を抽出しに入れて、それから時計を巻く)ねえ、シヨオン・ケオ、随分夜も長いのに、あたしみたいな若い女を夜の明けるまで一人ぼつちで置いとくのは、あんまりだと思はないかい?

五

シヨオン。(變てこんな様子で)それもさうだが、もう直きわしら二人が婚禮すりや、お前もそんな愚痴をいはねえで済む。おいらあ、お通夜だらうが婚禮だらうが、こんな眞つ暗やみに外へ出るなあ嫌いだ。

ペギイン。(少し馬鹿にするやうに、元氣よく)お前、あたしがお前と夫婦になるものと一人で極めてるんだね。

シヨオン。ちやあんと固い約束をしたんぢやねえか? ライリイ和尚様が僧正様だか羅馬法王様だかのお許しを貰つて下さるのを待つてるばかりぢやねえか?

ペギイン。(臺の上で洗ひじまひをしながら調戲ふ積りて男を見る)お前、法王様がお前みたいな者の事を心配して下さると思つてるのかい? あたしが法王様なら、こんな村のことなんぞ心配はしないよ、あの藪脱のレッド・リナハンだの、びつ

このパッチインだの、カルホルニヤから追ひ歸されて氣が觸れた氣違ひのムラニイの一家だの、御所にいらつしやる法王様に心配して貰ふのにや、時節がら、わんまりろくでなしの連中ばかりだ。

シヨオン。(人聞きが悪いといふ風に)よしんば俺たちはろくでなしの連中にしろ、ほかの土地にだつてろくな人間ばかりゐるわけでもあるめえ、今の時節がわるけりや、何時だつてわりいんだ。

ペギイン。(馬鹿にして)おや、さうかい? あの巡査の眼をめつかちにしたダニイン・サリバンとか、あの死んだマアカス・クインのやうに、上手に愛蘭のひかし話をして婆さま達を泣かせて置いて、そのくせ羊を使へないやうな不具かたはにして六箇月も牢に這入つたりさ。あゝいふ連中がよそ外の土地にもゐるのかねえ、どうだらう?

シヨオン。ひなきや、とんだ仕合せだんべ。(言葉に妙な力を入れて)ライリイ和尚様はそんな奴等がほうつき歩いて若い女と無駄口たゝいてるなあ大嫌ひだとさ。

ペギイン。(小桶の水を外にぼちやりと捨て、じれつたさうに)ライリイ和尚様ライリイ和尚様もいゝ加減におし、(男の聲を真似て)今夜一嫌どんなあんばいにしたら怖くなく過ごせるだらうと聞いているだけのはなしだよ。(月の外を見る)

シヨオン。(加減しながら)クイン後家でも連れて来ようか?

ペギイン。あの怖い人かい? まつびら御免だ。

シヨオン。(彼女に近寄つて機嫌を取りながら)そんなに怖がつてると知つたら、父さんだつて家にゐてくれるよ、外は闇で、夜は長いし、それにおいら彼處の草つばらの溝とがんとこに變な奴がゐるやうに思つた、まるで狂犬みてえに唸つてるんだ。お前が怖がるだけのことはある。

ペギイン。(鋭く男の方を向いて)なんだい? お前が見たそれは人間なの?

シヨオン。(少し退きながら)なんだか俺にやまるつきり見えなかつたが、なんでも、唸りぬいて、さも苦しさをなんだ。聲のあんばいぢや若い男らしい。

ペギイン。(男の方に進んで)それでお前、その人が怪我でもしたのか、何處か病氣なのか、側へ行つて聞いても見なかつたの?

シヨオン。うゝん、おらあ聞かなかつた。あんな眞つ暗やみの寂しい所であんな聲を聞きちやゐられないや。

ペギイン。ほんとお前は強いね。もしか、その男の死骸があしたの朝の露ん中につゝばつてるところを見付かつたら、巡査や裁判所の連中にお前なんていふ積りだい?

シヨオン。(ひどく驚いて)おいらそんな事まで考へてゐなかつた。なあ後生だか

ら、ペギイン・マイケ、おいらがこんな話をしたつていはないで呉れ、父さん  
や他の連中も今やつて来るやうだが、聞かせちやいけねえ。こんな話を聞か  
せて見な、今夜のお通夜でしやべり散らしちまふだろ。

ペギイン。あたしが聞かせるか聞かせないか、そりや分らないよ。

シヨオン。ほら、もう其處まで来た。おい、いつちやいけねえ、い、かい？

ペギイン。自分でいはないが、い。

(帳場の後に行く。肥つた上元氣の酒屋の主人マイケル・ジエムスが入り来る、後から瘠せて疑ひ深  
さうなフイリイ・カレンと、肥つた、女好きらしい四十五六のシミイ・フレレルとが續いて入り来る)

男たち。今晚は！

ペギイン。今晚は。

マイケル。(帳場の方に行かうとする男たちに)さあ腰をかけて、休んで行くがい、ぜ。

(火の側のシヨオンの方に行く)シヨオン・ケオ、どうしたい？ お前も今夜は濱を越

してケート・カシデイのお通夜に行くんか？

シヨオン。おらわ行がねえ。これから近路して家へ歸つて寝るだ。

ペギイン。(帳場から口を出す)シヨオンさんは感心だよ。お父さんお前もあたしを

店に一人ぼつちで置いといて、自分は他家で夜明かしして、恥かしいと思は  
ないかい？

マイケル。(機嫌よく)ちよつくら家をあけたつて、一晚あけたつて、おんなじだ  
あな。一杯やつて死人の原ん中を抜けて歸つて来いつていふなあ、お前もひ  
どい娘だな。

ペギイン。あたしもひどい娘だらうが、お前もひどいお父さんだよ、此暗やみ  
の一晚中ひとり留守番をさせといて、あたしが一人で爐の火をつぎながら

犬がはえたり牛が唸つたりするのを聞いて、怖がつて齒をがたがたさせてゐても構はないといふのは。

ジミイ。(機嫌を取るやうに) なんにもお前怖がることはねえさ、お前のやうな立派な丈夫な身體の娘ぢやあ、男の二人ぐらゐ一息になぐり倒すだんべが？

ペギイン。(次第に氣が立つて來たらしく) 酔つぱらつた稻かりの若い衆たちもゐるぢやないか、東の谷には鑄掛屋の連中が野宿してゐるし、ろくでなしの兵隊たちが——あの罰あたりの奴等が——うどうぞ國中うろついでるぢやないか。

あたしをひどい目にあはせるやうな奴等は澤山ゐる、お父さんは自分の勝手にするがいが、あたしも一人で家に残つてゐるなあいやだよ。

マイケル。そんなに怖けりや、シヨオン・ケオに泊つて貰ひな。あれがお前の面倒を見るなあ、これからはあたりめえの事だからな。

(一同シヨオンの方を見る)

シヨオン。(ひどく當惑してまごついて) そりやをぢさん、おいらだつて悦んで泊つてもいゝんだが、ライリイ和尚様が怖いや。おいらがさういふ行狀をやつたら羅馬法王様だの大僧正様だのがなんていはしやるだらう？

マイケル。(馬鹿にするやうに) 意氣地なし奴が！ お前は此處に灯をつけて爐にあつてゐて、彼女は向うの部屋で寝りやいゝぢやないか？ どうか頼む、なんでもそこいらに變な奴がゐて、氣がふれてゐるか、死にかゝつてゐるか、溝ん中に寝てゐるやがるさうだから、今夜は誰かに此處へ泊つて貰つた方が此の娘も無事といふものだ。

シヨオン。(ぐちつぽく) おらあライリイ和尚様が怖いといつてゐるんだ。悪りいことをすゝめなさんな、もう直つさ夫婦にならうといふとこだ。



フリーイ。(馬鹿にし切った調子で)あの西側の部屋へ押込めて鍵をかけちまへ。さうすりや、いやでも泊るだろ、和尚様にもそれで言譯が立つさ。

マイケル。(シヨオンと入口との間に身を置いて、シヨオンにいふ)そら、さうしなよ。

シヨオン。(ありきりの聲を出して)をぢさん、歸してくんな、後生だ、出してくれ。出してくんなよう。(マイケルの側を通り抜けようとする)ほんとに出してくんな、お前の後生もよくなるぜ。

マイケル。(大聲で)こうれ、騒がねえで、まわあつてゐな。

(彼を押し戻して大笑ひしながら帳場の方に行く)

シヨオン。(手を握りしめて歸つて来る)あゝ、ライリイ和尚様、聖人様方、おらあ今日何處へ隠れたらいゝだろ? なむ、聖ヨセフ様、聖バトリック様、聖ブリジッド様、聖ヤコブ様、助けて下さいつ!

(振り返ると、入口に誰もゐないので、驅け出ようとする)

マイケル。(上着のしりを捕へる)これさ、お前、歸るんか?

シヨオン。放してくんな、放してくんなつたら。此罰あたりめ、放してくんなけりや、和尚様たちや羅馬の御所の赤い衣の僧正様方の罰をわたらせてやるぞ。いゝか。

(不意に上着の中から身體だけすっぽめて外へ驅け抜ける、上着はマイケルの手に残る)

マイケル。(振り向いて上着を高く持上げる)へん、かた藏さんの上着で御座あい。こんな寂しい西の田舎にも後光がさすほど堅い男があつたもんだ。ペギイン、仕合せと俺があんな眞面目な亭主を探しわて、やつたから、若けえ娘つ子が何人揃つて来てお前んとこの畑で草取りをやつたつて心配する種はないぜ。ペギイン。(自分の所有物の辯護を始める)何もわの人が和尚様のいふことを聞くから

つて、お父さんがそれを悪くいふにはわたらないわ？ もとはといへば、お前がぼつちりばかしのお給金を惜しがつて、あたしの手助けに小僧を置いてくれないのが悪いんぢやないか？

(上着を父の手からひつたくる、それを持って帳場に行く)

マイケル。(呆れて)何處で小僧を雇ふんだい？ 口上いひに頼んでカッスルバアの街を、小僧はゐないかあつて、怒鳴らせるんか？

シヨオン。(ほそ目に戸をあけて首だけ入れて種く小さい聲で)をぢさん！

マイケル。(シヨオンの真似をして小さい聲で)なに御用だい？

シヨオン。あの變てこな死にかゝつた奴がな、溝どぶの向うから見てゐるよ。お前んとこの鶏を盗みに來たんぢやねえか。(自分の肩から後を透して見る)あ、大變、おいらの後をついて來た、(室内に逃げ込む)もしあいつが俺のいつたことを立ち

聞きしてゐたんなら、きつと俺を生かしたり置くめえ、おら斯んなまつ暗やみにゐんなさびしい路を歸つて行くんだものを。

(暫時一同は好奇心を以て入口を見てゐる。外で誰か咳をする。それから、癩せぎすな若者クリステ・マホン入り來る、草臥れ切つてゐて、びくびくしてゐる。そしてひどくよこれてゐる)

クリステ。(小さい聲で)みなさん今晚は！

一同。今晚は！

クリステ。(帳場に歩み寄る)ねえさん、酒を一杯おくんな。(錢を置く)

ペギイン。(酒を渡して)にいさん、お前はあの向うの谷に野宿してゐる鑄掛屋さんのお仲間かい？

クリステ。さうぢやねえ。わしや遠くから歩いて來たもので、くたびれ切つてゐるんだ。

マイケル。(世話好きの調子で)そいぢや、火の側へ来てわたるがい。お前寒くつてはらが減つてるやうぢやねえか。

クリステ。ありがと！(酒のコップを持って少し左の方に歩み行く、ふいと立ち止まって見廻す)をぢさん、時々此處いらへ巡査が来るかい？

マイケル。我家の繁盛の時分にはな、此の店に於て飲用するビール及び酒類の販賣を免許すと窓に白く書いてあつたものだ。此四哩四方、店らしい店はほかにねえんだ、だから、誰も彼もみんな *Bona Fide*、さうでないなわ後家が一人ゐるだけだ。巡査は此處の家に用はねえわけだろ？

クリステ。(安心して)ぢやあ、大丈夫だね。

(火の側に行く、ため息をしたり、うめいたりする。それから側にコップを置いて腰掛ける。大根を食べ始める、疲れて弱り切つてゐるので、ほゞの一同が自分を珍らしさうに見てゐるのも氣がつ

かない)

マイケル。(若者の方に行く)なにかえ、お前が巡査が怖いのか？お前警察から追跡られてるんか？

クリステ。追跡られてる奴はいくらもあるよ。

マイケル。こんな不作だつたたり、戦争のおかげぢや、そりやさういふ奴も澤山ゐるだらう。(靴足袋の火の側にあつたのを取つてそつと持つて行く)なにかえ、竊盗か

クリステ。(陰気な聲で)もうちつと違つた名で、もうちつと大い事だとわしや思つてる。

ペギン。まわをかしな人だ。お前、學校で何か悪いことをして打たれたことはないの？自分で何をしたんか名が分らないのかい？

クリステ。(きまり悪るまうに)わしや物覚えの遅い方で、學校でも級の中つくらぬにゐた。

マイケル。お前がいかに分からずやでもな、竊盜といふなあ、人の物をふんだくつたり盗んだりすることだらうは知つてる筈だ。さういふことで警察から追跡られてるんか？

クリステ。(自分の家自慢で)わしやこれでもちやあんとした百姓の息子だ、我家のおやぢは(急に聲を落して)なむあみだぶつ、懐から金を出してお前さんとこの此家ぐるみすつかり買ったつて、懐を痛めたとも思はないぐらゐの身上だ。

マイケル。(感心して)盗みでねえとすると、何かでけえことかな？

クリステ。(得意になつて)うん、でけえことなんで。

ジミイ。性質の悪るさうな若衆だ。さびしい夜みちで若い女でも追つかけたん

か？

クリステ。(汚はしいといったやうに)え、とんでもねえ、わしや全く堅い人間だ。

フイリイ。(ジミイの方を向いて)ジミイさん、お前も察しが悪いな。今も此の人がお父さんは百姓だといつてゐたらう。それが今こんな情ねえ様子をしてゐるなあ、なんだらう、畑を取り上げられちやつたんだらう、それで誰でもやりやさうなことを此男もやつたんだらう。

マイケル。(意味ありまうに)そいつわ執達吏でもあつたかい？

クリステ。なあんの、さうぢやねえ。

マイケル。差配人かい？

クリステ。なあんの、さうぢやねえ。

マイケル。地主様かな？

クリステ、(うるさきうに)さうぢやねえつたら。さういふ話ならマンスタアのちつほけな新聞にだつて始終出てゐることだ。わしのやつた事はな、どんな人だつて、身分があらうが百姓だらうが、裁判官だつて陪審官だつて、まだやつたことのねえ真似だ。

(一同よろこばしい好奇心を以てクリステの側に近寄つて聞く)

フィリイ。ふうん、珍らしい若い衆だなあ。

ジミイ。此奴はダン・デビイの曲藝だつて負かしちまふだらう。おありがたい宣教師どんのやうに人間の惡りいことでお説教もやらかすだらう。フィリイさん、なんだか最一度聞いて見な。

フィリイ。お前なにか、白銀で金貨でも打つたんか、それとも銀貨でも拵へたんか？

クリステ。わしや一錢だつて一厘だつて、そんなことはしねえ。

ジミイ。そんならお前女房の三人も持つたんか？ おらが聞いたにや、北の國の方ぢや、坊様たちの中にも、そんな手合ひがちらほらあるといふことだ。

クリステ。(恥かしきうに)わしや、二三人どころか、まだ一人の女房も持つたことはねえ。

フィリイ。それぢや何か、向うの國の人たちみてえにポーア人の助太刀にでも行つて、殺されるところを助命になつて逐ん出されて來たんぢやねえか？ お前、東の國の方へ出かけて、クルーゲルやポーア人の獨立の助太刀に戦争でもやつて來たんか？

クリステ。わしやな、自分の生れた村を生れて始めて出たのは、先週の火曜日だ。

ペギイン。(幟場から出て来る)そんなら、此人は何もしたんぢやないんだよ。(クリステに)お前、人殺しもしないし、なんにも悪いことをしないし、にせ金も造らないし、どろぼうもなぐり合ひもしないし、何もしないんなら、何もそんなに逃げて歩くにやあたらないわ。お前なんにもしたことがないんぢやないか。

クリステ。(自尊心を傷けられて)親もねえ旅の者にそんなことをいふなあ不親切だろ、後には牢屋があるし、前には死刑があるし、一寸先は地獄のわしがやうなものに。

ペギイン。(他の連中に黙つてゐると眼で知らせる)そりやお前、話だけだろ。何もしたんぢやあるまい。お前のやうな大人しい若い衆ぢやキイキイ泣いてる豚の咽喉を裂くことも出来ないだらう。

クリステ。(見くびられたのを怒つて)そんなことがあるもんか。

ペギイン。(わざと怒つた風を見せて)そんなことはないつて? これ、箒の頭で頭を

ぶんなぐられても、いゝかい?

クリステ。(驚きの叫び聲を以て彼女の方に向ふ)打ちなさんな。先の火曜日に、わしやおやぢを殺しちやつた。やつばしわしを打つたからだ。

ペギイン。(びつくりして)お前のお父さんを殺したのかい?

クリステ。(落ちついて)ほんとに殺した。なむ、聖母様、おやぢの後生をお助け下さい。

フイリイ。(ジミイと兩人あとずさりする)強い男だなあ。

ジミイ。大變だなあ!

マイケル。(大に尊敬して)そりや、あにさん、確かに死刑だね、確かに死刑だけの

ものはあるよ。

クリステ。(もつともらしい調子で)おやぢはひでえ人間だった、年を取つて、どうつくばりで、わしや我慢がし切れなくなつたんだ。

ペギイン。鐵砲で打つたのかい？

クリステ。(首を振る)なんにも道具は使はなかつた。鑑札を持つてないからね。

これでもわしや法律に反くやうなことはしねえ。

マイケル。それぢや、柄の着いたナイフでやつたか？ なんでも世間ぢや血だらけのナイフでやるといふ話だ。

クリステ。(外聞が悪るさうに、大きい聲で)わしを犬殺しだとも思つてゐなさんか？

ペギイン。お前、お父さんの首を締めめたんぢやあるまいね、ジミイ・ファレルさ

んが警察に届けて犬を締め殺したやうなわんばいに、その犬といつたら、三時間も紐の端でキイキイいつてるんだもの、それをジミイさんはもう死んでるといふし、巡査は生きてるといふんだもの。

クリステ。わしやそんな真似はしない。いきなり鋤をふり上げておやぢの頭の脳天へ鋤の尖を打ち込んだ、するとおやぢはからつぼの袋のやうに俺の足んところへぐなりと倒れて、それつきりうんともすんともいはなかつた。

マイケル。(娘にクリステの杯に酒を注げと眼で知らせる)それで又どうしてお前が捕まらなかつたらう？ 埋めてでもしまつたんか？

クリステ。(考へながら)うん、埋めちやつた。丁度わしや畑を掘りつ返してるとこだつた。

マイケル。それから今日まで十一日といふもの、巡査はお前を追つかけて來な

いんか？

クリステ。(首を振りながら)一人も来ねえ、わしや豚だらうが犬だらうが悪魔だらうが何にでも向ふつもりで表道路を歩いて来たんだ。

ファイリイ。(利口らしくなづく)彼奴等が腕力づくで行かうといふのはありたり  
の殺人者のことさ。此人は氣が立つたら大變もんだ。

マイケル。大變だらうて。(クリステに)それで、あにさん、お前何處でその一件  
をやらかしたんだ？

クリステ。(疑ひ深くマイケルを見る)そりや、をぢさん、遠いとこさ、遠い、高い山  
の、吹きつさらしの端つこの方だ。

ファイリイ。(感心したらしくなづく)用心ぶけえ男だな、それが當然だ。  
ペギイン。お父さん、お前ほんとに小僧を探す氣なら、此人を小僧にしたら、

ソロモンのやうな智慧者の小僧が出来るわ。

ファイリイ。調査だつて此男をおつかながつてゐるから、此男を家に置いとさや、  
庭の肥料溜から犬が酒を舐めてゐたところで、嗅ぎ廻りに来る奴は大丈夫あ  
るめえ。

ジミイ。さびしい土地ぢや強いのが寶だ。自分のおやぢでも殺さうてい若い衆  
なら、地獄の旗についてる投槍を持った狐のやうな魔物が来ても負けやしめ  
え。

ペギイン。みんなのいふのはほんとだよ。あたしや此人を家に置いとけば、牢  
破りのカアキ色の殺人者だつて、幽霊だつて怖くはないわ。

クリステ。(驚きと勝利で得意になつて)どうも、大變だなあ！  
マイケル。(丁寧に)あにさん、お前に好い給金をやつて、あんまりこき使はない



から、此處で落付いて小僧になる氣はないか？

シヨオン。(心配さうに進み出る) ペギインのやうな娘がゐる斯んな堅氣な無事な家

へ、飛んでもねえ者を入れなさんな。

ペギイン。(ひどく鋭く) お黙り、誰がお前に口をきいたえ？

シヨオン。(身をすさりながら) こんな血だらけの手の人殺しの……

ペギイン。(彼の方に怒りつけさ) おだまりといつてゐるぢやないか。お前なんぞから馬鹿にされるわたしぢやない。(出来るだけ優しい聲でクリステにいふ) ねえ、あなたにさん、お前此處に落ちつくが、よ、わたしたちも出来るつたけの事はしてお前に不自由はさせないから。

クリステ。(驚き切つて) それで、此處にゐたら、つかまらないで済むだらうか？

マイケル。大丈夫だとも、もし萬一お前をおつかながらなままで、此處の土

地の巡査の奴等と來たら、極く大人しい、饑え切つてゐる、貧乏な野郎共だか

ら、野良犬にだつて手もつけやしねえ、よる夜中人騒がせなんぞしやしねえ。

ペギイン。(ひどく親切になつてこゝ動める) なにしる一寸でもいゝから落付いておいで

よ。お前だつて草臥れ切つてゐるだらう、足のまめから血が出るし、身體だつ

てウイックロウの羊みたいに洗はなくつちややり切れまい。

クリステ。(満足して周囲を見廻す) 好い店だね。ほんとに瞞す氣でなけりや、わしや

此處に落ちつかせて貰ひませう。

ジミイ。(飛び立つて) そおれ、しめたぞ、おやぢさんを殺した男が張番すりや、

娘さんだつて大丈夫だ。マイケルさん出掛けようよ。さうでねえと、お通夜

の奴等が良いところを飲みつ枯してしまふだらうぜ。

マイケル。(他の連中と戸口に行く) それであにさん失禮だが、お前の名は何とい

ふ？ 覺えて置きたいな。

クリステ。クリストファ・マホンです。

マイケル。ぢやあクリステさん、まわゆつくらおやすみ、あしたの午前ひるまへまた會はう。

クリステ。みなさん、おやすみ。

人々。おやすみ。

(シヨオンのほか一同出て行く。シヨオンは戸口にゐ残る)

シヨオン。あぶねえことのねえやうに、おいらに泊つて貰ひたくはないか？

ペギイン。(不愛想に)お前はライリイ和尚が怖いといつてゐたぢやないか？

シヨオン。今度はあの男もゐるから、おいらが泊つてももう悪いことはあるめえと思ふが。

ペギイン。お前に泊つて貰ふ必要がある時には、お前とまれないといつたら

う？ もう必要はないんだから、さつさとお歸り。

シヨオン。おらわライリイ和尚様さへ……………

ペギイン。だからライリイ和尚のところへ行つて、(嘲る調子で)お前もおありがたい坊様にでもしてお貰ひ、わたしは此人がゐてくれ、ばい、よ。

シヨオン。もし俺がクイン後家にでも會つたら……………

ペギイン。さつさとお歸りといつたらさ。騒々しく寝る邪魔をしないでおくれ

(男を押出して戸を鎖す)あの人ときたら、どんなお慈悲の聖人様だつて肝癢を起しちまふわ。(忙がしく動き廻る。前掛けを取つて窓へピンと張つて覆ひとする、クリステは怖々彼

女を見てゐる、やがてクリステの前に来て落付き拂つて上機嫌で口をきく)にいさん、お前火の側で横におなり。道中して来たんぢや草臥れ切つてゐるだらう。

クリステ。(長靴を脱ぎながら、内氣な様子で)わしや十一日も夢中で歩いて、夜だつて怖くつて眠れないんだから、随分草臥れ切つちやつた。

(自分の片足を上げて底まめを觸つて見ながら、それをさも憐む如く眺めてゐる)

ペギイン。(側に立つて、歎びを以て男を見る)お前の家はきつと偉い人が出た家だらうね、小さな華奢な足だもの、そして苗字も身分のありさうな苗字だね、フランスやスペインの華族様や王様にでもありさうだわ。

クリステ。(自慢らしく)全くわし等は偉かつたね、地柄の好いマンスタア地方の廣い地面を持つてゐたんだ。

ペギイン。そしてお前は額つきの上品な、立派な男ぶりの若い衆だからね。

クリステ。(よろこばしい驚きを見せて)わしがか？

ペギイン。あゝ、お前の来たのは西からか南からか知らないが、そこいらの娘

たちがお前にさういつて聞かせたことはなかつたの？

クリステ。(にがくしく)そんな覚えはない。わしが育つたあの貧乏な村ぢやみんなひどい嘘つきばつかしだつた。

ペギイン。それにしてもさ、お前此頃になつてから聞かされたらう、世間を歩きながら自分の身の上話を婆さまや娘さんたちに聞かせて来たんだらうから。クリステ。ペギイン・マイケ、わしや今日の今晚まで自分の身の上を何處でも話したことはない。此處で斯うあけすけに話しまつたのは、ちつと人が好過ぎるかも知れないが、わしの見たところぢや、お前たちはみんないゝ人達でそしてお前は親切さうな人だから、ちつとも怖いと思はなかつた。

ペギイン。(袋へ葉をつめながら)それはお前、みちく若い娘さんに會ふたんびに何處の小屋でも葉小屋でも、おんなじことをいつたんだらう？

クリステ。(彼女の側に行き、次第に聲が高くなる) わしや全く今夜までは何處でもこんなことをいつたことがない。十一日の間世間を歩いて、まだお前のやうな人を見たことはない。低い溝どぶや高い溝どぶを越して、北を見ても南を見ても、瘠せたとびくの畑にも、沼のへりにも、男とふざけてる若いしやなくの娘の子や立派な歩きつぶりの女衆はゐたが。

ペギイン。もしお前がくたびれ切つてゐなければ、きつとお前はオーエン・ロウ・オサリバンやジングル港の詩人連のやうにしやれた談話はなしや無駄口をきくんだろ。あたしが始終聞いているには、詩人でもものはお前みたいなんだつてね——氣が立つとカツとする強い怒りつばい人たちだつてね。

クリステ。(前よりも少し近く彼女に寄る) お前は澤山指環をはめてるね、こんなことを聞いちや悪いかも知れないが、まだ獨身ひとみかい？

ペギイン。斯んなに若くつから亭主を持つてどうしよう？

クリステ。(安心して) わしとお前とは似てゐる身の上だ。

ペギイン。(長椅子の上に袋を置いて、叩く) あたしはまだお父さんを殺したことはないわ。そんなことをするのは怖いもの、たゞ腹はらん中がむしやくしやつとして眼がくらむやうに腹が立つて来るのは、お前と似てゐるね、おしまひの時には大變な立ち廻りをしたんだらう？

クリステ。(生れて始めて女と打解けばなしをする嬉しさに大満足) そんなことはなかつた意地のわりい女が山を越えてやつて来たんだ。おやぢは常からむづかしやだつたが、それがその意地わる女にけしかけられたと來ちや、とても惡魔が自分でやつて來ようが、惡魔の先祖さんが出て來ようが、おやぢには敵はなかつた。

ペギイン。(不思議さうに)だけれども、お前を誰も怖がらなかつたのは不思議ぢやないか?

クリステ。(すつかり打解けて)わしがおやぢを殺したその日まで、愛蘭の國中にわしがどういふ人間だか、だあれも知つてる奴はなかつたんだ。わしも酒を飲んだりお通夜の御馳走に呼ばれたり、食つたり寝たり、おとなしい、あたりまへのけちな人間と思はれて、誰もわしのことなぞ氣にも止めなかつたん

娘。(月棚から蒲團を出して袋の上に重ねる)でも、若い女たちは捨てちや置かなかつたろ、さういふ連中とふざける時、お前どんなに氣取つたらう。

クリステ。(無邪氣に首を振つて)女たちだつてそんなことはなかつた。嘘ぢやない。村ぢやだあれもわしのことなぞ構はなかつたのさ。唯、口のきけない野良

の畜生共ばかりがわしを知つてゐた。

(火の側に腰かける)

ペギイン。(失望して)わたしはお前がノルウェーの王様だの東の國の人たちのやうな生活をしてゐたのかと思つたんだよ。

(ティアルの上にパンと乳の入れ物を置いてそれから男の側に来て腰かける)

クリステ。(情なさうに笑ふ)王様のやうだと? わしや夜あけから日のくれまで働いて、泥だらけになつて、掘つたり、動いたりして、楽しみといつたら、眞つ暗な晩に一人で山に行つて、ないしよで兎を捕ることだけだつた、わしや密獵は上手だつた。濟まない話だがね、(顔る眞面目)それで一度なんぞ、肥料の鐵耙かきを持つてつて魚を突つ刺して最うちつとで六箇月の禁錮をくふとこだつた。

ペギイン。それでお前たつた一人で外に出てくらやみの中にゐるのを樂みにしてゐたの？

クリステ。さうさ。それでわしや聖マアチン様のお祭の日のおてんと様のやうに嬉しかつた。灯が北の方に動いて行つたり霧の切れ目に見えたりするのを眺めてゐると、兎がキイ〜いつて鳴き出す、わしや草の中をぐん〜馳け出すんだ。それから十分やつつけると、山を下りて来る、さうすると鴨やあひるは天下の往來にのび〜寝てゐやがる、肥料溜こやしどめんところまで来るともうおやぢのいびきが聞えるんだ——大きな氣味のわりい駝を寝てゐる時にはしよつちうやつてゐた。起きてる時にはしよつちう怒鳴つてる人だつた。まるで怒つたり怒鳴つたり悪口つく金びかの軍人さんみたやうだつた。まるでペギイン。まあ、ほんとに、くはばら、くはばら。

クリステ。まつたくね、おやぢが幾日も幾日も飲み續けてゐて、眞赤な明方か、そいでなきや、夜中に起き出して、五月時分のとねりこの樹のやうに素裸すっぱだかになつて庭に出て、星の面つらへ土塊つちこころを投げつけて見たり、子豚(4)だつて牝豚だつておびえ死んぢまひさうな眞似をやらかすところを見ちや、きつとさういひなさるだろ。

ペギイン。あたしもほんとに怖くなるわ。それでお前とお父さんとたつた二人切りだつたの？

クリステ。ほかにだわれもゐやしねえ。よしんば、うんとたくさん息子娘がゐて廣い世間を押し歩いてゐたところで、誰だつてあのおやぢをいつが日にも呪はずにやゐられまい。夜中のまつくらがり眼が覺めて咳をするつたつてくしやみをするつたつて。

ペギイン。(うなづきながら)ほんとに珍しい親子さね。あたしはまだ我家のお父さんのことをそんな悪口いつたことはないよ、もうあたしも二十歳とちよつとになるけれど。

クリステ。わしのおやぢならお前だつてきつと悪口つかずにはゐられまい。うちのおやぢが人に迷惑をかけずにゐるなわ、巡査に手向ひしたり人と喧嘩をしたりして二箇月三箇月禁錮されるとか癲狂院に押込められてゐる間ぐらゐなもんだ。(沈んだ調子で)おかげで、わしもつらい目を見てくらして来た、火曜日の日にやつつけて頭をぶち割るまでといふもの。

ペギイン。(彼の肩に手を載せて)お前此處の家に安心しておいで、誰もお前をいぢめやしない、お前のやうな立派な若い衆はこれから澤山い、思ひをするがい  
ら……

(誰か戸を叩く)

クリステ。(扉にカッリついて)あゝ大變！ こんな遅くに誰が来たんだ、此頃わし

や巡査と幽霊が怖くつて。(再び叩く音)

ペギイン、だれだい？

聲。(外から)わたしだよ。

ペギイン。わたしといふのは誰だい？

聲。後家のクインだよ。

ペギイン。(急いで立つてパンと乳を男に與へて)さあどん／＼食べて眠さうに見せかけるんだよ。あの人はお前が話さざたと見たら、夜明けまでもおしやべりを

續けるから。

(クリステはパンを手に取り戸に背を向けて恥かしさうに腰掛ける)

ペギイン。(あらつぼく戸をあける) どうかしたの? それとも、こんな遅くに、何か入り用?

(後家クイン一步踏み入つてクリステをのぞき見る)

後家。わたしや此下でシヨオン・ケオとライリイ和尚さんに會つてね、お前さんとこの不思議な人の話を聞いたのさ。それで今頃はその人が酔つぱらつて怒鳴つてお前を困らせてやしないかつて、二人とも心配してゐなすつたよ。

ペギイン。(クリステを指して) 怒鳴つてるかどうか見ておくれ。いま、晩の御飯とお乳で眠くなつて寝ようといふところさ。歸つてライリイ和尚さんとシヨオン・ケオに聞かせておやり。

後家。(進み入つて) わたしや今夜は最うわの人たちには會はないよ。實はね、その若い衆を連れてつてわたしんところへ泊めてくれつて、わの人たちに頼まれたんさ。

ペギイン。(びつくりして) 今夜かい?

後家。(側へ来て) 今夜さ。和尚さんがいひなされるにや、どうもさういふ人間を母のない子の家に泊らせるのは不都合だとさ。(クリステに向つて) にいさん、今晩は!

クリステ。(恥かしさうに) 今晩は!

後家。(面白さうな好奇心で眺める) まわお前さんはにこ〜してゐる子ぢやないか? お前さんの氣を立たせて人殺しをさせたのは、よく〜のひどい目に會はし



たんだらうね。

クリステ。(不安らしく)まあ、そんなもんでせう。

後家。そんなもんでせうぢやないよ。斯うやつてお前さんがお乳とお菓子をお前に置いておとなしく腰掛けてるのを見ると、ほんとにわたしやかはいさうになるよ。お父さんを殺すよりは教會問答でもいつてる方がお前にや相當だわ。

ペギイン。(帳場でコップを洗ひながら)此人はね、世間の偉い人とても立派に並んで行けるんだからね、餘計なお世話だよ。さあお歸り、先週の火曜日から歩きづめで草臥れ切つてる人だから、何時までも邪魔をしないでおくれ。

後家。(大人しく)御飯が濟んだら、二人で出掛けようよ。にいさん、お前とわたしは丁度好いつり合ひだよ。八月の市で安い唄うたひが唄つてるのは、丁度お前とわたしのやうな人たちのことだよ。

クリステ。(無邪氣に)お前さんもお父さんを殺したんかい？

ペギイン。(卑しむ如く)殺すものかい。此人はね、古い鶴嘴でお父さんを打つたんだとさ。それで其さびがお父さんの血に浸み込んだと見えて、それから弱つて、とうとう死んぢやつたんだよ。そんな卑怯な殺し方をしちや、若い男たちもほめやしない。(クリステの左側に行く)

後家。(機嫌よく)そりや褒められもしないがね、なにしろ、子供に死なれ亭主をなくした後家の女の方が、お前のやうに路傍で一寸目づかひされても直ぐにどんな男の後でも追つかけてくやうな若い娘さんよりや、若い人の爲には好いお連れだわね。

ペギイン。(ひどく怒り立って)クインさん、お前にそんなことがいへるか、男の顔が見たいばかりに夢中になつて山を馳け下りて來たくせに。

後家。(馬鹿にし切つて)わたしがかい? まわ何しろライリイ和尚さんがお前さんたちを一つに置くまいといふのは利口だね。(クリステを引つぱつて立たせる)お父ちゃんを殺した男は、よつほど人を迷はせるね。ねえ、にいさん出掛けた方がいゝわ。さあ立つてわたしと一緒に出かけよ。

ペギイン。(クリステの腕を押へる)この人はやらないよ。此處の小僧になつたんだから、我家のお父さんの留守に外へ出して盗まれたり誘拐かどわされたりは、あたしがさせない。

後家。ひるま働く店に夜まで泊る小僧があるものかね、にいさん、お前わたしと行く方がいゝよ。山の上り端にちよびつと立つてるわたしのちつちやい家いせを見ておくれ。

ペギイン。クリステ・マホン、朝までお待ち。此人の家いせといつたら、屋根は孔だらけの草屋根で、狭い庭よりか山羊の牧場によささうなんだよ、そして家を片付けてくれる乞食つ子一人だつてゐやしないのさ。

後家。わたしが自分のちつちやい庭で一人で色々工夫してゐるところを見たらクリステ・マホン、このわたしが獨身ひとでくらすやうに出来てる人間だつてことがお前にも分かるわ。屋根を葺くのだつて草を刈るんだつて羊の毛を切るんだつて、わたしほどの上手はメヨメヨに二人とはゐやしない。

ペギイン。(大聲で嘲る)ほんとうにお前さんは工夫するやうに生れついてるんだよ。お前さんが黒い小山羊を自分の乳で育て、コンノオトの僧正様がその山羊をスチウにして召上がったら、あとで人間の味がしたといふのは評判な話ぢやないか? それからお前さんがフランスから来た酔っぱらひの船長さんの顔を刺つてやつて、あの山をビョイビョイ〜飛んで歩く山羊の肝臓おなでもよぢ

れさうな烟草を一口と三ペニイのお錢を貰つたといふのも評判の話だ。

後家。(面白さうに)にいさん聞いたかい? 一週間も立つとあの調子でお前にも

わたるんだよ。

ペギイン。(クリステに)そんな人に構はずお置き。いつまでも此處であたしたちの邪魔をしずと、さつさと自分の豚小屋に歸れといつておやり。

後家。今歸るよ。だが此人はわたしと一緒に行くんだよ。

ペギイン。(クリステを振り動かして)にいさん、お前は睡かい?

クリステ。(怖々、後家にいふ)御親切はありがたうござんすが、わしや此處の小僧になつたんだから、此處にゐた方がよござんす。

ペギイン。そら、聞いたかい? さつさとお歸り。

後家。こんな時刻に山を越すのはさびしいわ、もし此人と一緒に来てくれない

んなら、わたしや今夜は此處へお前さん達と一緒に泊めて貰はう。ペギちやん、わたしをその長椅子セトキに寝かしとくれ。あの人は爐の側に寝るだらう。

ペギイン。(言葉短かく烈しく)いやだよ。歸つておくれ。歸らなけりや追ん出すよ。

後家。(自分の肩掛を身に引寄せて)やれ〜、二十も年が上だと、斯んなにも嫌はれるんかね、(クリステに)にいさんおやすみ。そしてお前も氣をおつけよ。もしお前あの娘ことふざけ合ひでもしたら、とんだ目に會ふよ、あの娘はね、キラキインのシヨオン・ケオさんと夫婦になるのに、羊の皮の書付かなんか來るのを待つてるばかしなんだからね、これはお前に聞かせろつてわたしやいひ付けられたんだよ。

クリステ。(ペギインが戸を鎖すと、その側に行つて)あの人があとでいつてたのはなんだい?

ペギイン。嘘つばちばかりだ。氣におしでない。ほんとに、シヨオン・ケオは失敬な奴だ、あたしに隠目附をよこしてさ。今度とつ捕へたら見るがい、見るがい、や。

クリステ。それでお前さん夫婦になるんぢやないのか？

ペギイン。僧正様がわざ／＼歩いて來なすつて、あの人と夫婦いっしょにしてやらうつたつて、あたしやいやなこつた。

クリステ。やれ／＼ありがたい。

ペギイン。さあお前の床が出來てるよ。あたしが先達てから自分の手で綿を入れた蒲團だよ。のんびりしておやすみ。明朝あした鶏が鳴いたらあたしが起すからそれまでゆつくりおやすみ。

クリステ。(ペギインが奥の部屋へ行かるとすると)神様もマリヤ様も聖バトリック様も

親切なお前を守つて下さるだろ。(彼女自分の部屋に入り戸を閉める、クリステはゆつくりと床をのべて、非常な満足な以て蒲團に關つて見る)ふん、こりやさつぱりした柔かい床だなあ。とんだ運が向いて來て好い知り合ひが出來たもんだ——好い女が二人で俺のやうなもの、爲に喧嘩してくれるのか——おら今夜になつて考へる、なせもつととうのむかしおやぢを殺さなかつたもんだらう。

(幕)

## 第二幕

舞臺前幕に同じ。まぶしい朝の日光。クリステは愉快らしく嬉しき様子で女の靴をみがいてゐる。

クリステ。(棚の上の瓶を数へながら獨り言をいふ) あすここに五十ある。彼方に十ある。あの上のが二十ある。瓶が八十。茶碗が六つに毀れたのが一つ。皿が二枚。コップが澤山。壺はわんなに澤山あつちや、學校の先生だつて勘定するのに骨が折れるだろ、あれだけの酒があれば、クレヤの郡中の金持も學者もみんな酔つばらはせてしまへるだらう。(靴を注意深く下に置き) これでねえさんの靴も今夜はけるやうに綺麗になつた、ブラッシも良いブラッシだなあ？ (彼はブラッシを下に置いてそろ／＼と鏡の方に行く) ふん、面白いとこだ、おらがなじみの犬

や猫の代りに、賑やかな連中と一生騒いでゐられる。のらついで煙草を吸つたり酒を飲んだり、用といつたら、時々お客に壺の口を抜いてやつたり、コップを拭いてやつたり、水呑みを洗つてやつたりするだけのことだ。(壁から鏡を取り下して椅子の背に立てかける。それから其前面に腰を下して顔を洗ひ始める) 俺はせんたい好い男だと始めからまんざら知らねえでもなかつたが、我家の鏡と來たら、ひでえ鏡で、天女の顔でもひんまげてやぶ睨みに見せさうなやつだつた。おらお今日からしやれることにする、皮膚もすべ／＼した綺麗な皮膚になつて年びやく年中土や肥料をつツ突き返してゐる不器用つくさい若い奴等と違ふやうにならう。(ピクリとする) ねえさんが歸つて來たかな？ (外を見る) 知らねえわねさんたちだ。こいつあ困つた、上着も着ねえで、此長い頸も出しつばなしの儘ぢや、何處へ隠れよう。(外を見る) 着物を着たまふまで部屋に這入つ

てゐよう。

(上着と鏡を取り上げ奥の部屋に駆け込む。外の戸が押しあけられ、スーサン・アラダイがのぞき込む、それから戸を叩く)

スウサン。誰もゐないよ。(再び叩く)

(ネレイがスウサンを押し込んで後から續いて入る、アーナア・ブレイクとセイラ・タンセイも入り来る)

ネレイ。二人とも山へ出歩くにしちや少し早過ぎるね。

スウサン。シヨオン・ケオがあたしたちを囁かしたんで、そんな人は始めつからゐないんぢやないかしら。

アーナア。(薬と蒲團を指して)あれを御らん。昨夜は彼處あそこに寝てゐたんだよ。もう行つてしまつたんぢやつまらないわ、斯んなに早く起きて一生懸命になつて山を駆け上がつて来て、お父さんを殺した人を見ないんぢやつまらないわね

え。

ネレイ。あれがその人の靴ぢやあるまいか?

セイラ。(靴を取り上げる)もしかさうなら、お父さんの血がついてる筈だわ。殺された人つてもものは、血が流れ出してぼた／＼落ちるつて、新聞にも書いてゐるぢやないか?

スウサン。セイラさん、そら、それは血だろ?

セイラ。(臭ひを嗅ぐ)沼の水らしいよ。なにしろこれは其人の靴に違ひない。あたしや斯んなに白つばい泥だの赤つちやけた泥だの芝だの海のコまかい砂だののくつついてる靴を見たことがないわ。確かに、此人は、よつほど歩いて来たんだねえ。

(右手に行き、男の靴を片つばはいて見る)

スウサン。(窓際へ行き) ひよつとかしたら、マイケルをぢさんの靴をはいてベルムウレットの方へ逃げてつたかも知れないわ。セイラさんお前追つかけていだよ、先にお前、北の方の海岸で黄<sup>(5)</sup>ろい髪の奥さんの鼻にかみついたつていふ男が見度くつて、驢馬を車にくつつけて十哩も出掛けて行つたお前のことだもの。(外を見る)

セイラ。(片つぽの靴をはいた儘で急に馳て行く) おしやべりはお止め。あたしたちや瞞されたんだよ。(もう片つぽの靴もはく) あたしによく合ふ靴だわ。あたしこれを取つといて、これをはいて和尚様のとこへ行かう、夏冬、何時和尚様の處<sup>(6)</sup>へ行つたつて、ろくな懺悔の種がなくつてきまりが悪いやうなもの。

アーナア。(戸の側で聞いてゐて) しつ! 部屋に誰かゐるよ。(少し戸をあける) 男の人だわ。

(セイラは大急ぎで靴を脱いで前に在つた處に置く。一同一列になつて戸の隙からのぞいてゐる)

セイラ。あたしが呼んで見よう。にいさん! にいさん! (男は首を出す) ペギちやんはうちにゐますか?

クリステ。(鼠のやうにおとなしく出て来る、鏡を持つてる手は背中の方に隠してゐる) わしが飲<sup>(6)</sup>ひお茶に山羊の乳を入れてくれるつて、今、岡<sup>(6)</sup>の方へ乳の出る山羊を見に行きました。

セイラ。あの失禮ですけど、お前さんはお父さんを殺したといふ人ですか?

クリステ。(鏡の掛けてあつた釘の方へ横ずきりに歩るきながら) さうです。

セイラ。(持つて来た鰯卵を取り出し) ほんとにはんとによくお出でなすつたのね。あたしやお前さんの今日のお菜にと思つて家鴨の卵を二つ持つて来たのよ。ペ

ギちゃんとその家鴨は駄目だけれど、これは極く上等の種よ。一寸手を出して、あたしのいつてることが嘘かほんととか觸つて御らんなさいな。

クリステ。(恥かしさうに進み出て左の手を出す)こりや大きくつて重量がある。

スウサン。あたしはバタを一包持つて来てよ。なんにもつけずにパンを食べるんぢやかはいさうですからね、お父さんを殺して遠くから逃げて来なすつたお前さんが。

クリステ。どうも御親切にありがたう。

アーナア。あたしはお菓子を少うし切つて来たわ。遠い處から歩いて来たんぢやお腹がすいてゐなさるだらうと思つて。

ネレイ。あたしは卵入りの小つちやな牝鶏ひなを持つて来ましたよ——すつかりお料理がしてあるのよ——昨夜牧師さんの車にひかれてつぶされた雛なのよ。

此胸の脂肪あぶらづいたところを見て下さい。

クリステ。ほんとに、はち切れさうだね。(進物を持ってゐる手の甲にて觸つて見る)

セイラ。つまんで御らんなさいな？ お前さんの右の手は勿體なくつて使へな

いの？ (彼女クリステの背後に廻る)あら、鏡を持つてゐるわ。まわ、鏡を背中に向

けて持つてゐる人つてあたしや今日始めて見たわ。お父さんを殺すやうな人はよつほどおしやれだに見えるわ。(娘たちくすくす笑ふ)

クリステ。(無邪氣に笑つて進物を鏡の上に積み重ねる)ほんとに皆さん、今日はありがたう。

(後家クイン戸口から急いで入り来る)

後家。セイラ・タンセイに、スウサン・ブラデイに、アーナア・ブレイクかい！

まわほんとに、此朝つばらから何の用でお前たちは此處へ来たの？



娘たち。(くすくす笑ひながら)あれがお父さんを殺した人よ。

後家。(娘たちの方に進み)わたしだつて知つてるとも。實はねえ、わたしは下でやる駆けつくだの跳びつくだの投げつくだの、中に此人を入れたいと思つて来たんさ。

セイラ。(賑やかに)クインをばさん、そりや好いわね。あたし自分のお嫁入の仕度料を賭けてもいゝわ、きつと此人は勝つてよ。

後家。そんならお前、祝宴おめでたの御馳走をする氣で、此人に十分食べさせて休ませてやらなくつちやいけないよ。(進物を手に取つて)にいさん、お前、御飯は濟んだの？ それとも、まだ？

クリステ。まだです。

後家。さあ、お前たちは大勢だから。さあ〜サツサと働いて此人に朝御飯を

食べさしておやり。(クリステに)此處へおいで(娘達が茶を入れたり朝の食事の仕度をする間に自分の側にクリステを腰掛けさせる)そして、ペギちゃんが来るまであたしたちに身の上話をしてお聞かせ、五月のお月様のやうにそんなに黙つてにや〜してゐなくつてもいゝぢやないか。

クリステ。(そろ〜得意になつて)長い話だから、聞き倦うきなさるだろ。

後家。お前みたいな立派な元氣なこすい若い衆がはにかむにはわたらないよ。

お父さんの頭を打ち割つたのは自分の家でやつたのかい？

クリステ。(煽動でられて少し恥かしさうに)いゝえ。わしらはおやぢの畑の寒い斜面なだちの石つころだらけのけちな畑を掘り返してゐたんです。

後家。それでお前、お金でもせびつたのかい、それともお父さんを追ん出ささうなお嫁でも貰つてくれといつたのかい？

クリステ。なわに、そんなことはいひやしない。わしや一生懸命に掘りつ返し掘りつ返ししてゐると、「よそ見ばかりしやがる馬鹿野郎奴」とおやぢがいふんです。「さつさと和尚様んとこへ行つて近え内にカセイ後家と夫婦になりますからつていつて来う」といふんです。

後家。そしてその後家さんはどんな人なの？

クリステ。(恐ろしまうに) 山を越えて来やがつたそりやおつかねえ奴なんです。年齢は四十五ぐらゐで、目方は二百五ポンドぐらゐもありさうな、片足びつこで、片眼めつちちで、それで若い者でも老人とじやうでもなんでも御座れの評判のふしだら女なのさ。

娘たち。(クリステの周囲を取り巻き彼に給仕しながら) まわ大變だわねえ！

後家。それでどうしてお父さんは、お前をその人と夫婦にさせようとしたんだ

い？ (彼女は鶏肉を少し取つて食べる)

クリステ。(次第に満足して食べる) おやぢは、わしがやうな者は斯んなむづかしい世間にうしろ見をやつてくれる人間が入り用だつていふんだ、ほんとうのところは、自分がその女の家に住まつて、その女の金で酒も飲めると、そればかり考へてゐたんさ。

後家。火の氣のない爐よりも、後家の女よりも、宵のお酒よりも、もつといやなこともあるだろよ。それでお前、お父さんを打つたのかい？

クリステ。(だんくに氣がはずんで来る) なわに、さうぢやない、わしやいつてやつた、「おらわあんな女と夫婦にはなんねえ、俺が生れた時、あの女が六週間も俺に乳を吞ましてくれたことは、世間でみんなが知つてゐる。あの女に悪たいつかれるのが怖くつて、鴉だつて海の鳥だつてあの女の庭には影もさゝな

いほどの鬼婆ぢやねえか」と斯ういつた。

後家。(からかふ調子で)丁度好い女房だわねえ。

セイラ。(熱心に)をばさんのいふことを氣におしでないよ。それでお前、お父さんを殺したのかい？

クリステ。するとおやぢが、「あの女は手前<sup>てめえ</sup>なんぞには勿體ねえ人間だ、さつさと行かなきゃ、大八車にひかれた蟲けらみたいにおつ潰しちまふぞ。」といふんだ。「俺だつてさうはさせねえ」とわしやいつた。「さつさと出かけろ、出かけなけりや、おらわ今夜こそ悪魔に手前の足を八つ裂きになせつちまふぞ」  
・「俺だつて、さうはさせねえつもりだ」とわしやいつてやつた。

(真直ぐに起き直つてコツアを振り廻す)

セイラ。ほんとにさうだともねえ。

クリステ。(重々しく)その時お日様が雲と山との間から出て好い氣持にわしの顔にあたつた、「神様に後生を頼め」つておやぢは大鎌を振り上げた。「お前こそ頼め」つてわしや鋤を振り上げた。

スウサン。勇ましい話だねえ。

アーナア。上手に話すわね。

クリステ。(褒められて氣が強くなつて、鷄の骨を振り廻しながら)おやぢは鎌で打込んで来た、其處をわしや東の方へ飛びのいた。それから背中を北に向けて、おやぢの頭の脳天へ一打ち食はせた、咽喉の瘤まで割れておやぢは倒れた。

(彼は鷄の骨を自分の咽喉ぶえの邊まで上げる)

娘たち。(一緒に)まわ偉いわ！ 好い人ねえ！ ほんとにいゝ子ねえ！

スウサン。きつと神様が此人をクインをばさんの二度目の御亭主にする氣で此

方の方によこしたんだよ。をばさんも一生懸命に御亭主を探してゐるんだけど、此土地の人はみんなをばさんをおつかながつてゐるからね。ちよいと、セイラ・タンセイさん、此人ををばさんの膝に載せておやりよ。

後家。此子にからかふんぢやないつたら。

セイラ。(セイラは棚と帳場の方へ大急ぎで行つて二つのコップと酒を持って来る)ほんとお前さんたち二人は英雄だわ。船西さんの唄にある外國の戀人たちのやうに二人で腕を組合せて一口飲んでおくれ。(二人の腕を組合せてコップを持たせる)さあ、さあ、此西の國の評判の連中の御ひいきに一杯のんでおやり、海賊に説教師に酒密造者に陽氣な騎手に、それから口の干上がった巡査さんや、國法の裁判を賣物にしてお腹を肥す倍審官だのの連中の御ひいきに。

(壺を振り廻す)

後家。セイラ・タンセイ、口上がうまいね。さあクリステ。

(二人は腕を組合せて男は左の手、女は右の手で持つて飲む。飲んでゐる最中にペギン・マイケが乳のバケツを下げて這入つて来てびつくりする。一同飛び上がつてクリステより離れる。クリステは左手に行く。後家クインのみ前通り腰掛けてゐる)

ペギン。(あらしくしくセイラに)何がほしいんだい?

セイラ。(前掛をよぢりながら)烟草を一斤。

ペギン。おわしがあるかい?

セイラ。財布を忘れて來たわ。

ペギン。それぢや取りに行つといで、そして馬鹿にしに來ないでおくれ。(後

家に向つて最つと念入りに馬鹿にした調子で)クインをばさんは何が入る?

後家。(づうくしく)糊を二錢おくれ。

ペギン。(怒鳴り出す)へん、昔からお前さんところには家内中にシャツ一枚シイ

ツ一枚白い物はないくせに。あたしはお前さんに糊は賣れないよ。キラムツクの方へでも行つたらいい、だろ。

後家。(他の娘等と外へ出ようとしてクリステの方に向く) ペギちゃん、お前今日は大層御機嫌が悪いね、にいさん、お前忘れちゃいけないよ、午後から遊戯や競走があるからね。

(一同出て行く)

ペギイン。(命令的に) そんななきたならしい物はうつちやつて、コップを片付けとくれ。(クリステ大急ぎで片付ける) 腰掛を壁にくつつけとくれ。(クリステ其通りにする) その鏡を釘におかけ。どうしてそんな物を持ち出したんだい？  
クリステ。(大人しく) わしや身綺麗にしようと思つてゐたところさ。此土地にや綺麗な若い娘が澤山ゐるね。

ペギイン。(鏡を) 若い女の話は止めとくれ。

(右手帳場に行く)

クリステ。斯ういふところにゐちや、誰だつて身綺麗にしようと……..  
ペギイン。おだまりといつたら。

クリステ。(怖々彼女の顔を暫時見る。それから仕方なしに鋤を取上げて彼女の方に行き、わざと落付いて) わしがおやぢをやつつけたのは斯ういふ鋤だつた。

ペギイン。(なほ鏡を) お前今朝から六遍もその話はしたぢやないか。

クリステ。(不平らしく) お前が聞きたがらないのは不思議だなあ、あの娘達はわしの話を聞かうと思つて四哩も歩いて来たんだに。

ペギイン。(びつくりして振り向く) 四哩だつて！

クリステ。(わびる調子で) お父さんが、此村ぢやみんな *Dona Hilde* はかしたつてい

ひなすつたらう？

ペギイン。そりや表道路を来れば *Dona Fide*、だがあの連中は石を跨いで河を越えて来たんさ。さうして行けば、ほんの二歩か三步ぐらゐで行けるんだよ。あたしはね、今朝郵便屋の持つてる新聞をのぞいて見たよ。(意味ありさうに、力強く) 今日は大變な事が出てゐた。(左手の室に行く)

クリステ。(心配して) わしの人殺し一件か？

ペギイン。(部屋の中から) 人殺しだよ！

クリステ。(大きい聲で) 親殺しかい？

ペギイン。(再び部屋から出て来て右の方に来る) さうぢやないよ、或人が絞罪にされた話が半ページばかり出てゐたのさ。恐ろしい死に様だね、殊に親を殺した人間ぢやあね。さういふ奴には誰も同情してくれやしない。死んでしまへば、

けちな切れで巻いて狭いお墓に入れて石灰を頭からぶつかけるだろ、丁度、女が茶碗からごみでも捨てるやうに。

クリステ。(ひどく情なさうに) あゝ困つたなあ！ わしやあふねえだらうか？

昨夜はお前もわしが此處にお前たちと一緒にゐればあふねえことはないつていつてゐたがなあ。

ペギイン。(きびしい調子で) 何處にゐたつてお前、巡査と夜歩きをしておしやべりをやりさうなあんなお轉婆娘の連中にしやべつて聞かせりや、何處にゐたつてあふないのは分かつてるぢやないか？

クリステ。(恐怖を以て) あの連中がしやべるだらうか？

ペギイン。(馬鹿にしたやうな同情を以て) どうだかね、あふないよ。

クリステ。(大きい聲で) わしがやうな人間を絞殺して、何が面白いだろ？

ペギイン。あの連中にはとんだ面白いことかも知れない。お前が繩の端でぶらんぶらん動いてるかはいさうな様子を見るためなら、あの連中はどんなことをするか知れやしない。お前の頸は立派な太い頸だねえ！ 死に切るまでに三十分は苦しむだろ。

クリステ。(長靴を取つてはく) そんな心配があるんなら、わしやナイフィンの河べりやエリスの原をインウだのカインのやうにまごつき歩いた方がよささうだ。ペギイン。(からかひ始める) その方がいゝだらう。此土地へ巡廻する裁判官の連中は情知らずだとわたしは聞いてゐる。

クリステ。(口惜しさうに) 此土地で情知らずは、裁判官ばかりぢやない。(彼女を見上げる) わしがやうな寂しい者は、地獄に墮ちたみぢめな天の使たちが神様を見るやうに、女子供を見て歩くんだ。また此處を出て行くのはかはいさうだとは

思はないのかなあ？

ペギイン。此頃は貧乏な女たちが何百となくメヨを通つて行くから、お前が寂しがるわけではないよ。

クリステ。(ながくしく) さびしいわけがお前には分かるまい。日がくれて、灯が斜に射してる小さい村を通る時、又知らない土地を歩いて先きの方で犬が鳴いたり後の方で犬が鳴いたりする時、市まちに着いて方々の溝ぞうのかけにも接吻の音や嬉しさうな戀の口説を聞きながら、からつぼのすきつばらに氣がめいるやうになつて自分だけ歩いて行く時、どんなに寂しいものかお前には分かるまい。

ペギイン。お前は變だよ、わたしが今日まで會つた宿なしの人の中での變な人だよ。

クリステ。世の中に一人で寂しくくらしめてゐりや誰だつて變にもなるだらう？  
 ペギイン。あたしは變ぢやないわ。あたしは今まで一生お父さんとたつた二人  
 でゐたけれど。

クリステ。(無眼に感心して)お前のやうな美しい綺麗な女が寂しいわけがない、男  
 はみんなお前のやさしい聲を聞かうと思つて寄つて来るだらうし、お前が路  
 を歩けば、小さい子供達がお前の歩く邪魔をするだらう。

ペギイン。お前のやうなお世辭のうまい人間が寂しいといふのもあたしには解  
 からないわ。

クリステ。お世辭がうまい！

ペギイン。女と談話はなしをしたことのない者が、今お前のいつたやうなことがいへ  
 るものかえ？ 寂しいといふのは只見せかけで、あたしに取り入らうと思ふ

んだろ。

クリステ。見せかけなら結構だが、わしや始終寂しいんで、生れつきさびしく  
 生れたんだ、あけ方のお月様みたやうに。(入口に行く)

ペギイン。(彼の話が飲み込めぬらしく)まわ何しろあたしには分からないよ、どうし  
 てお前のやうな立派な若い衆で、お父さんを殺すくらゐの勇氣のある人が、  
 どうしてほかの人より運が悪いんだかあたしには分からないわ。

クリステ。わしにも自分で分からないが、今日わしが腹ん中は熱湯で煮られて  
 るやうだ、わしとお前とは廣い地ぢの中に置いて別れて行かなけりやならな  
 い、わしとお前とあの世で聖人様たちと一緒に神のおさばきを受けるその日  
 まで、これから何年立つても又とひと朝お前の側でわしが目を覺ますことは  
 あるまい、わしは杖を持つてもう出かけよう、絞くびり殺されるのは情ないこつ



た。(出掛けようとして)此家(このうち)にわしは置いては貰へないのだ。

ペギイン。(鋭く)クリステ。(クリステ向き直る)此處へおいで。(クリステ彼女の方に行く)そんな棒(ぼう)なんぞ捨てちやつて、火(ひ)にちいつと泥炭(すす)でも入れとくれ。お前は此處の小僧(こぞう)さんだから、此處(こゝ)からうろつき出されちや困るよ。

クリステ。此處(こゝ)にゐれば絞罪(くび)になるつていつてゐたぢやないか。

ペギイン。(やつとのことと至極親切になる)あたしはよそで此二三週間(しさんしゅうかん)以來(いらい)の愛蘭(あいらん)の恐ろしい事件(じけん)を讀んで見たが、お前(まへ)の人殺(ころ)し(し)のことは一言(いちごん)も出てゐなかつたよ。(立ち上がつて帳場(ちやうば)に行く)きつと死骸(しかい)を見付け出さないんだらう。あたしたちと一緒にゐれば大丈夫(だいじゆう)だよ。

クリステ。(驚いて、ゆつくりといふ)わしをかついだんだね、(怖々、それでも嬉(うれ)しまうに彼女の後(あと)に従(したが)ふ)それぢや、わしや此處(こゝ)にゐてこれからお前(まへ)の側(そば)で働(はたら)けるんだね、

今日(けふ)から最(た)う寂(さび)しいことはない。

ペギイン。あの後家(ごけ)や娘(むすめ)たちにそゝのかされて自分で出掛け(でかけ)さへしなけりや、

お前(まへ)が此處(こゝ)にゐる邪魔(じゃま)を誰(たれ)がするものか？

クリステ。(悦んで)それぢやこれからわしの耳(みみ)ん中(なか)はお前(まへ)の聲(こゑ)でいつばいになりお前(まへ)のその眼(まなこ)がわしの二つの眼(まなこ)にびつたりと合(あ)ふのだ。お前(まへ)が暖(ぬる)かいおてんと様にあたりながらふらつき歩くのを見てゐたり、夜(よ)になればお前(まへ)の足(あし)を洗(せん)つてやることも出来るんだ。

ペギイン。(優しく、少し困つた様子で)お前(まへ)は手近(てぢか)かに使(つか)ふのには頼(たの)もしい若い衆(しゆん)だとわたしは思(おも)ふよ。先刻(さつき)は娘連(むすめづれ)と仲間(仲間)になつてわたしを困(こ)らせただけだ、お前(まへ)が元氣(げんき)のある氣樂(げんが)な心(こゝろ)だての若い衆(しゆん)でなければ、あたしだつて相手(あいて)にはしなうよ。

(シヨオン・ケオは背に籃を背負ひ、馳け込んで来る。あとから後家クインも入り来る)

シヨオン。(ペギインに) 俺が今、下を通つて来ると、お前んとこの山羊がジミイの畑で菜つばを食つてたよ。早く行つて止めなけりや食ひ過ぎてはち切れちまへぜ。

ペギイン。まあ、大變!

(頭へ肩掛を被つて外に馳け出す)

クリステ。(人々を見廻して、なほ元氣よく) わしも行つて手傳はう。小山羊を取り扱ふのは上手だから。

後家。(目を閉めて) あの娘にだつてそのくらゐは出来るよ、今ね、シヨンちゃんがお前にながあい話があるんだとさ。

(面白さうに微笑して腰掛ける)

シヨオン。(ポケットから何か取り出してクリステに與へる) 君、そいつを見てくれ。

クリステ。(見る) 西部へ行く歸りの切符か!

シヨオン。(大心配でぶる／＼しながら) おらあそれをお前にやる、それから此新しい帽子もやる、(籃の中から帽子を出す) 此二重鬘のズボンもやる、(ズボンも引出す) 此コートは此三哩此方ちや一番の黒い羊の毛で織つた品だ(コートも與へる) こりやみんなお前にやる、わしの祝福も添へてやる。だから、どうか此土地を立つて、わしらを昨夜の宵のくちまでの無事なむかしに返してくれ。

クリステ。(新しい横柄な様子で) 何のためにわしを追ひ出さうとするんだ?

シヨオン。(助けて貰ひたさうに後家を見て) クリステ・マホン、おらあ嘘の話を拵えることはからつただからお前に眞實の事をいふ。俺はあのペギインと夫婦になるんだ、だからお前のやうな利口な大膽な男がああ女の家にゐちや俺にや

安心が出来ねえ。

クリステ。(殆ど喧嘩を求めるやうに)それで、わしを追ん出すつもりで鼻ぐすりをくれようといふんか?

シヨオン。(哀願する聲で)な、あにさん、悪くもつてくれちや困る。よそ外の土地の方がお前にはいいんだ。よそへ行きや、金のくさりだの光つた着物だの着られて、立派な奥さん衆と馬に乗り廻すことも出来るだらう。

(シヨオンはクイン後家に助けてくれと熱心な目じらせをする)

後家。(側に来て)此人のいふことはほんとだよ。お前はよそへ行つてしまつて、あの娘がお前に惚れないやうにする方が好いわ。シヨンちゃんは、とてもあの娘とお前とはつり合はないといふんだよ、世間ぢやみんなあの娘がお前と夫婦になるだらうつていつてゐるけれど。(クリステ大満足な顔をする)

シヨオン。(夢中に熱心になつて)あの女とお前とは性が合はねえ。あの女は悪魔みてえに強い性だから、二十日と立たない内にお前達二人でつかみ合ひをするやうになつちまふに違えねえ。(自分の手をつかみ合ひの真似をする)おらがやうな者があの女には丁度いいんだ。よしんばあの女がひつかき散らしたところで手も舉げないやうなおらがやうな大人しい正直者が丁度いゝんだ。

後家。(シヨオンの帽子を取りクリステの頭に載せる)何しろお前此人の着物を着て御らん、駆けつくらに出来るにしてもお前に貸してくれるだらうから。(奥の部屋の方にクリステを押しやる)着て御らん。着て見てから返事をしていゝやね。

クリステ。(着物が嬉しくつて、にこ／＼して)ぢやあ着て見よう。此着物を着て此帽子を被つたところをねえさんに見せたいな。

(奥の部屋に這入つて戸を閉める)

シヨオン。(大心配で)あの女に見せたいといつてる。クインさん、あいつは此處を出て行かない積りなんだらう。彼奴の身體にや悪魔が大勢ついてるから、きつとペギインと夫婦になるに違えねえ。

後家。(嘲るやうに)ほんとにね、若い娘つてもものはみんな強い人が好きで、お前みたいなものは嫌はれるよ。

シヨオン。(やけになつて室内を歩き廻る)ねえクインさん、おらあどうしよう？ 彼奴を訴へてやりたいが、さうするときつと牢から飛び出して来て俺を打つ殺すにちげえねえ。もしおいらが斯んなに信心深え人間でなけりや、おらあそらつと彼奴の後に廻つて行つて横つ腹から刃物を通す氣になるんだが。あゝ、あゝ、親のない子は不幸だ、始終馴れてるおやぢがあれは殺すのにも骨が折れなくつて、みんなの前で偉い人間にもなれるんだがなあ。(後家の側に来

る)ねえ、クインさん、お前、もし俺が子山羊を一疋やる約束をしたら、何とかうまい工夫をしてくれるか？

後家。山羊の子ぢやつまらないねえ。だが、もしわたしがあの男と夫婦になつて、お前を助けてやつたら、お前わたしに何をくれる？

シヨオン。(びつくりして)お前が？

後家。あゝ、さうしたら、お前わたしにあのお前んとこの赤い牝牛と牡山羊とくれるかい？ それからお前んとこの麥畑の中を通り抜けても好いといふ約束と、それから、ミカエル祭の時分に肥料を一荷くれることと、それからお前んとこの西の山で勝手に泥炭掘りをしていゝといふ約束を、してくれるかい？

シヨオン。(希望が出たので大よろこびで)するともよ。それからおらあお前に結納の

指環もやる、新しい着物も貸してやる、お前も婚禮の日にあの男を小ざつぱりさせたいだらうからな。それからおらのお前の馳走よるまひに山羊の子を二疋とにぎり酒を一ガロンやる、それからお前の婚禮の祝ひに笛吹き男をクロスモリナカバリナから汽車で呼んでやる、それから――

後家。もう澤山だよ。黙つといで、今あの男が這入つて来るから。

(クリステは新しい着物を着てひどく意気な様子で入り来る、後家は感心したやうに彼の方に行く)

後家。お前いま自分で自分の姿が見られたら、えびつてしまつてわたし達に口もきかなくなるだらう。お前のやうな人をメヨから西の國の方へやつてしまふのは惜しいもんだね。

クリステ。(孔雀の如く得意になつて)わしや何處へも行きやしない。此村は貧乏な村ぢやあるが、此處で落ついて満足してゐよう。

(後家はシヨオンに席をはづせと目くばせする)

シヨオン。ぢやあ、おらお潮が干てゐる内に行つて競走場の尺を計つとかう。お前が今日ロイヤの競走に勝つやうに願がけしよう、その着物も置いてくから使つてくんよ。左様なら！ (身をゆすぶりながら出て行く)

後家。(クリステに感心しながら)ほんとにお前すてきに好い男になつたよ。ちよいと腰をおかけよ。そして落付いてわたしと話をおしな。

クリステ。(威張り返つて)わしや外へ出て山の方へペギンを探しに行かう。

後家。あとでペギンを探す時間はどつさりあるわね。お前、ゆんべわたしとお前とは好いお連れだつてわたしがいつたのを聞いてたねえ？

クリステ。もうこれからは連れなんざ欲しがらないでも、誰も彼もわしに食べ物だの着物だの持つて来てくれる(帯を固く締めながら、月口の方へ威張つて行く)――

打ちでおやぢを股引の股まで打ち割つちまつた強い親なしつ兒をみんなが見度がつてるんだらう。(戸をあける、後へたぢたぢと戻る)なむあみだぶつ!

後家。(側へ行つて)どうしたの?

クリステ。殺したおやぢの幽霊が歩いて来た!

後家。(外を見て)あのふらついている男かい?

クリステ。(夢中になつて)あの地獄の幽霊に見えないやうにわしや何處へ隠れよ

う?

(戸が押しあけられる、老マホン戸口に現はれる。クリステ奥の戸口に隠れ込む)

後家。(大きに面白がつて)こんちは。

マホン。(不愛想に)今朝早くか昨夜くれ方、若い男が此處らを通るのを見かけな

かつたか?

後家。挨拶もしないで人の家へ這入つて来るお前はをかしな人さね。

マホン。若い男を見たかといつてるだ?

後家。(冷淡に)どんな様子の人だい?

マホン。みつともねえろくでなし野郎だ、身體にや人殺しの痕がついてゐて、

手にちつぽけな棒を持つてる。昨夜日ぐれにその男が此方の方へ来るのを見

たといふ乞食におらあ遇つたんだ。

後家。此頃ぢやとり入れの男衆が何百人となくスライゴの船に乗るのに此處いらを通るからね。その男に何の用があるんだい?

マホン。おらが頭を鋤の鐵板で打ち割りやがつたから、ぶつ殺してやるべえと思ふんだ。(大きな帽子を取り縞帯と膏藥で一ト塊りになつた頭を多少自慢らしく見せる)わい

つが斯んなにしやがつた。おらあ斯んなに頭を打ち割られてゐて十日もそい

つの後を追っかけて来たなわ偉いもんだろ。

後家。(兩手で彼の頭を押へて大喜びで眺める) 大變な怪我だねえ。だれが打つたんだい。

追剥ぎかい？

マホン。おらが生みのせがれが打つたんだ。追はぎどころかい、何でもねえ、うすよこれた吃りのぐづ野郎なんだ。

後家。(マホンの頭を手放して自分の手を前掛けて拭く) お前ねえ、此おてんと様の天日にその傷をさらし歩いて、世間でよくいふ腐れ頭にならないやうに用心おしよ。ほんとにひどい傷だね、自分のおやぢさんにこれだけの怪我をさせるといふまでには、お前もよつほどひどく其子をいぢめたんだらうね。

マホン。俺がか？

後家。(面白半分に) あゝ。老人の頑固ものが若い者をいぢめるのは随分な恥さら

しだわね。

マホン。(憤然として) いぢめるどころかい？ おらわ殺された聖人様のやうに堪忍し抜いて辛抱してゐて、とうとうおつ死ぬばかりになつただ、此老年になつてよ、手助けする奴もなかつて一人でおつぱり出されただ。

後家。(ひどく面白がつて) 悪い事にはどれだけの報いが来るかほんとに不思議なものだねえ。

マホン。俺が悪いと？ 俺をひでえ目に會はしたなわ彼奴だといつてるでねえか、彼奴は大つびらの嘘つき野郎で、出たらめばかしいつてやがる、褐色羊齒ん中でおてんと様に腹を干して半日でも寝てゐようつて奴なんだ。

後家。ちつとも仕事をしずにかい？

マホン。仕事どころかよ、仕事といへば、乾草の束を藎の莖のやうにおつ立て

て見たり、たつた一疋残つてゐる牝牛を追ひながら牛の脚を髻んところからぶつくとじいたり、そんなことでもやつてなけりや、自分の持つてゐる小鳥を、さう驚だの、ひわだの、いぢり廻してゐるか、さもなきや、おらが家の壁にかけてゐる小つちやな鏡に向つて自分の姿を見ちやいろんな顔をしてゐるやがるだ。後家。(クリステの方を見て) どうしてそんなにおしやれなんだろ? 若い女のあとでも追つかけ廻したんかい?

マホン。(軽蔑の聲を上げる) 追つかけるとい? 赤い腰巻の奴が岡の方から尻を振り振りやつて来るのを見つけたら、奴は忽ち柴ん中に隠れちまふ、それで細かい枝や葉のすき間から羊のやうな馬鹿な眼を突ん出して、穴の罅隙からのぞいてゐる鬼のやうに両方の耳をおつ立ててさ。女ぢや、大わらひだ! 後家。それぢやお酒のためでもあつたかい?

マホン。奴は酒の匂ひにも酔つばらつちまふ意氣地なしさ。それに彼奴は妙に腐つた胃袋を持つてやがると見えてな、何時だつたか俺が煙管ではんの三吸ひ吸はせてやつた、するともがいて苦しがるで、とうとう驢馬の車にのつて取り上げ婆さんこまで送りつけただ。

後家。(両手を振りしめて) まあ、わたしやほんとに、今日が日まで、そんな人の話を聞いたことがない。

マホン。さうだらうとも、聞いたことは全くあるめえ。彼奴と來ちや四つの國の國境の女といふ女の笑ひ草さ、若い娘たちは彼奴が路をやつて來るのを見ると草薊りの手を止めて聲を揚げて笑ふだ、マホンとこの馬鹿が來たわいつて。

後家。わたしは此世界中をやつてもいゝから、さういふ人を見たいもんだ。ど



んな様子の人だつたい？

マホン。ちいつほけな背いつびく野郎だ。

後家。色の黒い？

マホン。黒くつてうすぎたねえ。

後家。(熟考しながら)わたしやその男を見たやうに思ふよ。

マホン。(乗り氣になつて)みつともねえやくざ野郎だ。

後家。憎らしい、恐ろしい悪者だ、誰だつてつばもひつかけまい。

マホン。どつちへ逃げた？

後家。岡を越えて海岸から北か南へ出る汽船に乗りに行つたらう。

マホン。今からでも追つつくべえか？

後家。下のあの潮の干てゐる砂つ原を越して行けば、あの男と一緒にぐらゐに行

きつけるだろ、あの男は入江の上を十哩も廻り路して行くんだから。(月の方を指す)向うの端から下へと折れて、それから北東への路をおいで。

(マホンぶつきらぼうに出て去る)

後家。(後から大聲に怒鳴る)追ひついたら、うんと響を取つておやり、だけど、法律の手に捕まらないやうにするんだよ、お前のやうな家の中の荒武者でも、黒い冠を被つた判官様に判決文を読み上げられちややり切れないからね。(月をバタンと打つて、恐怖に蹲つてゐるクリステを暫時見る、やがてぶつと吹き出す)ほんとに、お前は此西の國切つてのいたづらものだよ、お前が股引のはらまで眞つ二つに切り割つたといふかはいさうな人は彼なんだね。

クリステ。(外を見る。それから後家にいふ)此話をあの女が聞いたら何といふだろ？俺に何といふだろ？

後家。さうさね、お前の頭をぶんなぐつて、家から追ん出しつちまふだらう。

かはいさうに、あの娘はお前を偉いもの、積りでゐるのに、お前はお父さんを殺したといふ嘘つばなしを拵へたくだらうない嘘つきさんなんだから。

クリステ。(怒りに殆ど口もきけない様子で、戸口の方を向き、半分を隔り言のやうに) 死んだ真似をしやがつて、又生きつ返つて、古跡が鼠を追つかけるやうにおらが後を追つかけやがつて、此處までやつて来て、愛蘭の美しい女衆と俺との中に邪魔を入れやがる、あんな死人の屍骸のやうな奴あ海ん中へうつちやつてもいいんだ……

後家。(前よりもやゝ眞面目に) それはあの人の一人息子のいふことかい？

クリステ。(怒つて) 一人息子だと？ あんな奴はかけ残りの一本切りの歯が痛むがい、片眼つぶれて、あいてる眼で路の曲りつ角に七十七疋の魔物でも見

るがい、片脚ちんばの古い木の脚でびつこひいて焼けてる墓の中へでも這入るがい、や。(外を見る) 今、海岸を越してゐる、天の神様が高い浪を立て、あいつを此世から洗ひ流して下さればい。

後家。(愛想を盡かして) お前、恥かしくはないかい？ (彼の肩に手を載せて自分の方に向ける) どうしたの？ 泣き出しさうぢやないか？

クリステ。(やけになつて悲しみながら) わしやあの女の顔から後光のやうに愛の光がさしてゐるのを見た、そして子供の天使たちに話を聞かせてゐなざる聖ブリジッド様を思ひ出すやうなあの女の言葉を聞いたのに、もうあの女は俺に背なかを向けて、ひどい言をいふだらう。婆さまが節の腫れた驢馬を坂でも追ひ上げるやうに。

後家。身體を掻いたりひつかいたりしてゐる娘をつかまへてお前は歌を作つて

るんだ、あの娘の身體には店で賣つてるとぶろくの腐つた臭氣ニホのが浸み込んでるぢやないか。

クリステ。(じれったまうじあの人は天國で商賣あきなひをしてもいゝぐらゐの人だ、わしやこれからどうしたらいい、だらう、偉いものにされてたのを、たつた一日で天から寝返り打たれちやつた。

(娘たちの聲遠くに騒がしく聞える。後家は窓から外を見てゐたが、急いでクリステの側に来る)

後家。うちの人をなくしてから、わたしがやつて来たやうな眞似をお前もやつてればいい、やね、わたしは岡の上で長いことくらしてゐる、或時は上機嫌で外で日なたぼっこしながら、靴足袋をつくろつたり、肌衣を縫つたりしてゐる、又或時は窓から帆前船や單桅漁船いっぽんばしらや網船が海を渡つて行くのを眺めて、遠くの方の何處かに浮いてゐる勇ましい毛もくじやらの人たちの事を考へた

り、自分がたつた一人で長い年月くらして行くことを考へたりしてゐるのさ、クリステ。(興味を引かれて)お前さんはわしと似てゐるね、まつたく。

後家。似てゐるとも、それだからわたしはお前が氣に入つたんさ、岡の上のわたしのちつちやい家でわたし一人でお前の世話をして上げよう、さうすりやお前が人殺しだか、さうでないかつて聞く人だつてありやしない。

クリステ。もしわしがペギインと別れたら、どんな事をしてくらすんだ？

後家。お前の出来るやうな好い仕事があるよ——わたしの小家の中を白く塗るのに貝殻を拾つてくれたり、小さい家鴨の小屋を造つたり、わたしが持つてゐる古い小舟に新しい皮を張つてくれたり、するのさ。わたしの家はかけ離れた一軒家だから、あの糸車の隅つこでお前は利口なお爺さんたちにも遇へるだろ、そしてあすこでお前とわたしがなしよ話をしたり抱き合つたり面白

い思ひが出来る………

聲。(外で、遠くから呼ぶ)クリステイ！クリステイ・マホン！クリステイ！

クリステ。ペギインだらうか？

後家。若い娘たちがお前を下の競争に呼び出しに来たんだろ、あの連中にわたしや何といつて聞かせたらいゝんだい？

クリステ。ペギインを承知させるやうに俺の味方になつてくれ。俺はもうあの人が望みだ。(後家立ち上がり窓に行く)あの人を承知させる味方すわつとをしてくれさうすりやお前の死に際に神様が手を伸してお前を極樂の畑の近路から、天のお堂の聖母の御子様の足臺の下まで導いて下さるやう、神様に祈つて上げる。

後家。うまいお祈りだねえ！

聲。(次第に近くなる)クリステイ！クリステイ・マホン！

クリステ。(心配して)来るよ。後生だから、俺の味方になつて助けてくれる約束をしてくれ。

後家。(暫時彼を見てゐても)もしわたしがお前を助けてやつたら、お前が此處の家の主人になつた時、お前わたしが通り度い路を通る権利をくれること、それから子山羊を一疋と、それからミカエル祭の時に肥料こやしを一荷と、きつと呉れる約束をするかい？

クリステ。夜のお星様と空にかけて、約束する。

後家。それではわたしはお父さんのことは一言もいふまい、ペギちゃんか何時になつてもあの話を知らないやうに。

クリステ。もしおやぢが又歸つて來ることがあつたら？

後家。そしたら、あの人は狂人でお前のお父さんではないといひ切らうぢやないか、今日濱の砂つばであばれてるのを見たとなわたしが證人になつてもいい。

(娘たち馳け入る)

スウサン。下の競争においでなさいな。ペギちゃんがあなたが来るんだつていつてますわ。

セイラ。飛びつこがもう始まつてよ、下の砂つばで驢馬の駆けつくりの時にあなたに着せる騎手の服を持つて来てよ。

アーナア。おいでなさいよ、ねえ？

クリステ。もしペギちゃんに向うにゐるんなら、俺も行く。

セイラ。ペギちゃんみちは小路でシヨオン・ケオにからかつてゐるのよ。

クリステ。そいぢや俺も行かう。

(馳け出す、娘たち後を追つて出て行く)

後家。これで、もしおしまひに不首尾と来て、子供をなくし亭主を死なせたわたしのやうな後家より外に、あの男の味方がなかつたら、とんだおもしろい話だわねえ。

(彼女も出て行く)

(幕)

### 第三幕

一〇四

舞臺前幕に同じ。同じ日の午後。ジミイ少し酔つた氣味で入り来る。

ジミイ。(呼ぶ)ペギイちゃん！(奥の室に入る)ペギイちゃん！(再び室内に戻つて来る)ペギイちゃん！(ファイリイ同様に酔ひ氣味で入り来る、ファイリイに向つて)お前あの娘を見たか？  
ファイリイ。いゝや知らねえ、おらあショオン・ケオに驢馬の車を持たせておやぢどんの迎へにやつた。(戸棚をあげようとする、鍵がしめてある)なにしろ、お通夜の朝にあんな状態になつちまふたあ呆れた男だ。又あの女も、鍵をかけてくれたあ悪い奴だ、あの女、あの若い野郎に大騒ぎしてゐやがるで、こちらが咽喉が渴いて死んだつて、構つてくれやしめえ？

ジミイ。あの女が大騒ぎやるなあ無理もねえ、あいつ、玉ころがしの奴をまる

負けにしちまつて、それから輪投げの奴も負かし、射的の奴の鼻をぶつくヒいて、下でやつてる競争にみんな勝つちやつた、騙けつくりでも、飛びつくりでも、踊りでも、何でもござれだ！ よつほど連の好い奴だな。

ファイリイ。そりや今勝つたつて、又うまく負かされちまはあな。あいつ十言としゃべらない内におやぢを殺したほらを始めて、鋤でぶんなぐつた話をやりやがる。

ジミイ。人間も自分の訴へぢや絞罪にはならないんだな、やつのおやぢも今頃は腐つてしまつたらう。

(老マホンゆつくりと窓の外を通る)

ファイリイ。もし誰か長い鍬でその畑を掘りつ返してゐたと思ひなさい、その男があのおやぢの頭の鉢の二つ割れを二つはじくり出したと思ひなさい、新聞

一〇五

や裁判所で何といふだらう？

ジミイ。そりやあな、洪水で溺れ死んだむかしの丁抹人だともいふだらう。

(老マホン入り来り戸口に近く腰掛けて聞いてゐる) お前聞いたことがあるか、ダブリンの市ではコンノオトの船室の青い瓶みたいに獨體が並べてあるといふはなしだ。

ファイリイ。お前それをほんとにするんか？

ジミイ。(喧嘩腰で) 刈入れの後でリバプールの船で歸つて来た若い男がそいつを見たといふぢやないか？ その男がいふにや、あすこいらぢやさういふ物を置いといて、むかし此世界に生きてゐた偉い人たちの陳列みせばをしてゐる。白い獨體も黒い獨體も黄ろい獨體もある、すつかり齒の揃つた奴もある、又ほんの一本きりつか齒のないやつもあるとよ。

ファイリイ。そりや、嘘でもあるめえ、俺が子供の時、家の向うに墓場があつて

お前の腕ぐれえ長い大腰骨おのほねの男の骸骨があつた。そりや恐ろしい奴だつた、

おらあ天氣の好い日曜日にはよく悪戯にそいつを組み合せて見た、きらく

光つた骨の奴で、世界中何處の市に行つたつてあんなのは見られめえよ。

マホン。(立ち上がり) 見られめえと？ 此頭を見る、鋤の只一打ちで打ち割られ

た、かういふなあ何處どこへ行つたつていつが日にも二つたあ見られめえ。

ファイリイ。やれ〜大變な！ 一體だれがお前を打つたんだ？

マホン。(得意に) おらが生みのせがれがやつただ。ふんとだと思へるか？

ジミイ。ふうん、人間の心ん中にや不思議なことが隠れてゐると見えるなあ！

ファイリイ。(疑はしさうに) そりやどういふあんべえにやられたんだね？

マホン。(室内を歩き廻り) おらあ何百里の長い道中して、小綺麗な寐床に寐せて貰

ひ一日に四たびづ、腹一杯食はせて貰つてやつて来た、何一つするぢやねえ、たゞ正直銘の話聞かせるだけなんだ。(二人の方に少しく攻勢を取つて進む)一杯のませてくん、さうすりや聞かせてやる。

(後家クイン入り来り驚いてマホンの背後に立つ。マホンは左手なるジミイとファイリイに向つて立つてゐる)

ジミイ。あの女ひとに頼むがい。肩掛の中にかくして持つてるやうだ。

後家。(早足にマホンの側に来る)お前、此處にゐるの？ あんまり遠くへは行かなかつたと見えるね？

マホン。おらあ汽船が通るのを見たけど、のどが渴いて足が痙攣ひっぴれて来たからあんな奴はどうでもなれと、斯う思つて、引つ返して来ただ。(彼女の肩掛の下を見る)一杯のましてくんろ、おらあ前週まへの火曜日から歩きづめでへたばりさ

うだ。

後家。(コップを取りながら、囁る調子で)火の側へ腰を掛けて少しお休み。へたばるのも道理さ、歩いたり、喧嘩したり、おてんと様にさらされたり、(自分が持つて来た石の瓶から密造酒を興へる)さあお上がり、お前が幸福しやふで長生きが出来るやうに祝つてあげるわ。

マホン。(飲みたまうにコップを取つて火の側に腰掛る)ありがたう！

後家。(二人の男たちを右手にソツと呼んで)お前さんたち知つてるかい？ あの男は今日、は怪我で正氣でなくなつてるんだよ、先刻さつわたしが會つた時は鑄掛屋さんにひどい目に會はされたんだとか取り止まらない話をしてゐたのさ。それからクリステの話聞いて、いきなり自分の頭を打つたのは自分の息子だといひ出したんだよ。ほんとに、氣違ひは怖いね、これから行く路で誰か殺すか



も知れない、その人が自分に怪我をさせたんだと思つて。

ジミイ。(全く信じ切つて)全く恐ろしいこつた。俺の知つてた奴が赤い馬に蹴られたつたが、それから暫らくといふもの、ひやみと馬を殺したつけ、しまひにや時計の内部を食つて死んでしまつたが。

フイリイ。(騒はしきうに)あいつはクリステを見たんだらうか!

後家。見やしないよ。(止めるやうな手つきで)あの人の頭ん中へあの子の事を思ひ出させないがい、よ、さもないと、もし人殺しでもあつた時にはお前も呼び出されるよ。(首を廻してマホンの方を見る)そらつ! 聞いてるわ。まあ待つといで、わたしがうまくごまかしてすつかり落付かせるから。(マホンの方に行く)お前、どんな氣持? もう落ちついたかい?

マホン。(酒の爲に少し感傷的になつて)おらわ最うどうなるべえ、なさけねえ話だ、

今日の状態は。やつが生れた時からおらが手鹽にかけてやつて、それが讀本の二冊目も讀めねえ馬鹿と來てゐるで、學校から歸つて來るにも、足をびつこひいたり、鑄掛屋の驢馬みてえに打たれてまつ黒くあざを拵へて來ることも度々だつた。自分に一番身近かの肉親のやつが手をあげて自分を殺さうとしたり、一人ぼつちで夜中に苦しみながら死ななけりやならねえたあ、ほんにはあ、情ねえはなしでねえか。

後家。(何と返事をしてよいか分らないので)さうやつて落付いてお前が話をしてゐるのを聞くと、わたしたちが先刻見かけた人とおんなじ人だと思へるだらうか?

マホン。おらわ確かにおんなじ人間さ。おらわ、これ、今年六十のすたりものだ。この年齢まで生きるなわ恐ろしいこつた、子供は親のいふ事を聞かず野

良をしゃがつて、その子供を叱つたり、どやしたり、何のかんで、親の身はせいもこんも盡さちまふだ。

ファイリイ。(ジミイに)正氣のやうだ。(後家に)お前さいて見な、その息子といふな  
あどんな奴だつたか?

後家。(意味ありさうな眼つきでマホンに)お前を打つた息子といふのは、年齢は二十か  
一ぐらゐで、駆けつくらだの、飛びつくらだの、何でも勝負の上手な人だつ  
たかい?

マホン。(怒りのうめき聲を出して彼女に向ふ)あいつは馬鹿だつておらわ聞かせたでね  
えか、あいつもこれからは親なしつ子の味を知るだろ、年寄も子供も馬鹿に  
して、あいつに悪口ついたり、怒つたり、疥癬だらけの野良狗みてえに蹴と  
はしたりすることたらう。

(大なる喝采の聲、やゝ遠く聞える)

マホン。(兩手で耳を押へる)下ぢやあ何を怒鳴つてゐやがるんだ?

後家。(微笑をちらつと見せて)あの連中は、若い子を喝采してゐるんだよ、此西の國  
のチャンピオンのいたづらものを。(再び喝采の聲)

マホン。(怒に行く)あの聲を聞くとおらが胸は裂けさうだ、此一週間このかた、  
おらが頭の鉢はびくりびくり脈がしてゐるだ。駆けつくらをやつてゐるんか?

ジミイ。(戸口から外を見る)さうだ。今あの男を驢馬にのつけて砂つばを駆けさせ  
ようつてんだ。あの遮眼革した驢馬に乗つてゐるんがいたづらものだ。

マホン。(不思議さうに)あの若い衆がか? もしお前があの男を馬鹿者だとさへい  
ひなさりや、おらああの男をおらが迷ひ子のせがれにそつくりだといひ切つ  
てもいゝくれえだ。(自分の頭に手をあて、心配さうに)そけえらまで出かけて駆け

つくらを見物して来べえかなわ。

後家。(彼を止めて、鋭く)およし。お前はベルムレットの方の路へ出掛けるがい、  
 だろ、お前の寝る場處もないやうな斯んな處にぐづ／＼してゐないがい、さ。  
 フイリイ。(進み出て)此女のいふことに取り合ひなさんな。そこの腰掛の上に載  
 つかりや、すつかり見えるだろ。あげ潮にならない前にやつちまはうつて、  
 みんなが急いでるんだ、お前が下の岩の間の路を歩いて降りてく内にはあら  
 かた濟んぢまふだろ。

マホン。(腰掛の上に乗る、後家は彼の側に立つ)海の端んところが又すつかり見える。角  
 んところからみんなが出て来るな。あいつが先さだ。あいつは一體何者だらう？  
 後家。あの人だね、世界のチャンピオンさ、けふは何から何まであの人の勝に  
 なるんだよ。

フイリイ。(外をのぞく、競争に熱中する)あれを見なさい。あの男追つつかれるぞ。  
 ジミイ。なわに、あれが勝つとも。  
 フイリイ。ジミイさん、ゆつくら見てからいふがい、ぞ。いひ切るにやまだ早  
 かる。

後家。(大聲を出して)門のそこを抜けたから御らんない。驅けるのがうまいねえ。  
 ジミイ。わかいの、しつかりい！  
 マホン。三番目のを通り越したぞ。  
 ジミイ。みんなを負かすぞ。

後家。二十人と競争したつて、みんな負かすに違ひない。  
 マホン。あの乗つてる驢馬を見な、星でも蹴とばしさうだ。  
 後家。あら、飛んだ！(夢中になつてマホンにつかまつて)落つこちた！ 又乗つた！

そら。みんなを駆け抜けるよ！

ジミイ。驢馬を打つてる様子を見な！

フイリイ。村の娘たちがけしかけてるわ！

ジミイ。これが終ひの一廻りだぞ！ もう柱も取れちやつたな！

マホン。あの狭い處を見な！ 水つ溜りへ踏ん込みさうだ！ (怒鳴る) うまいぞ！

そうれ、通れた！

ジミイ。そら、並んだぞ！

マホン。好い野郎だ！ 勝負がついた、勝つたぞ！

(大なる喝采の聲、一同聲を合せる)

マホン。(疑ふ様子) なんだ？ 胴上げしてゐる。此方の方へ来るんか。(怒りと驚きの大聲を上げて) クリストイだ。まちげえなく！ あの唾を吐く様子も歩きつゝ

もおらわ知つてる。

(マホン腰掛より飛び下り戸口へ飛んで行く、後家彼を押へて引き戻す)

後家。落ちついておいでといつたら。あれはお前の息子ぢやないよ。(ジミイに)

此人を止めとくれ、さうでないとお前、人殺しの尻押しをした廉で一ヶ月も牢に入れられて罰金を取られることになるよ。

ジミイ。俺が押へてる。

マホン。(争ひながら) 放してくれ！ 放してくれ、皆の衆、おらわ今日こそあいつの頭に警打ちをしてやるだ。

後家。(あらつぽく彼を振る) あれはお前の子ぢやないんだよ。あれは此處の家の娘さんと婚禮しようつて人なんだよ、此處は政府の鑑札も受けて、立派な商買のある店で、密造酒だつてあるんだよ。

マホン。(びつくりして)わいつが一人前の物持ちの娘と夫婦になるつてえ！お前たちがみんな氣違ひか？おらあ女の氣違ひばかりし入れとく氣違ひ病院にでも踏ん込んだんだか？

後家。頭を打たれてお前こそ氣違ひになつてるんさ。あの子はね、此西の國の評判者さ。

マホン。ありやおらがせがれだ。

後家。そら、お前は氣がちがつてる。(外に喝采の聲する)路の角のところでみんながあの人の萬歳をやつてるのが聞えるかい？お前の子は馬鹿だつてお前もいつてゐたぢやないか、生れつきのほんとの馬鹿の萬歳をいふやつがあるものかね？

マホン。(がつかりしたやうに)あの男が氣がふれてるんぢやあるめえか。(再び喝采)

おらがせがれの萬歳をいふ奴はねえ筈だ。あゝ、おらあ此世界をおつたまげさせるやうな氣違ひになつたと見える！(手を頭にあて、腰を下す)おらあ何時だつたか、十疋の眞赤な鬼が俺の魂を酒樽につめ込まうとしてゐるのを見たことがある、それから、狸のやうな大い鼠でぶがおらが耳たばから生き血を吸つてるのを見たことがあつた、だが、今日が日までおらあ一人前の男とあの涎つたらしの阿呆と取つ違ちがえたことはなかつた。もう俺もいよく駄目かな。

後家。そりやあたりまへさ、お前の頭の鉢が別れちやつたんだもの。

マホン。ぢやあ、俺もあいつもお酒みの罰だ、まだ三週間も立つめえ、おらあリリックの若い女たちとここで夜よるから朝まで飲み續けて身體がきかなくなるまで飲んだくれたことはあるが、今日が日までおらあまだ氣が違つたことはねえんだ。(不意と後家に聞く)俺が顔つきはどうかしてるか？

後家。ほんとに、變だよ。お前がねぼけたことばかしいふ狂人だつてことは、三つ子にだつて分かるよ。

マホン。(前よりも多少の元氣を以て立ち上がる) そんならおらあ、そこらの貧民院にでも行くべ、悦んで俺を入れてくれるだろ、おらあ(大なる誇りを以て) これでも、恐ろしい大變な病人の見本になるだろ、時々は窮屈な胴着を着せられてわめき散らしたり、七人の醫者様がおらがいふことを本に書き付けたりしてよ。

お前それがふんとに思へるか?

後家。お前がどんな評判者になるにしても、早く行つた方がよささうだ、あの連中がいつか氣違ひを捕へたことがある、あんまりみんなで打つたので、とらうく其男は其處を飛び出して、あばれてあぶくを吹いて、海に溺れて死んだとさ。

マホン。(哲學的に) まつたく、人間ちうものは、頭が變になるてえと、悪魔になるだ。俺を出してくれ、おらあそうつと抜け路から出て行つて、あの連中に會はねえやうにする。

後家。(入口に案内する) それがい、よ。右の方へ向つておいで、誰にも會はないで済む。

(マホン走り去る)

フイライ。(悟つた風に) クインさん、お前何か手品をやつてるんか、おらああの男の後を追つかけて行つて、飯を食はして休ましてやらうよ、さうしたら、あいつが氣違ひなのか、お前とおんなじ正氣なのか分かるだろ。

後家。(困つたらしく) あの人の側へ行くんなら、自分の頭を氣をおつけよ。前から時々氣が變になつたつて話してゐたぢやないか?

フィリイ。おらあ大分いろ／＼彼奴の話聞いたぞ、日のくれない内に面白い芝居が始まるだろとおら思ふが。

(フィリイ出て行く)

ジミイ。へん、フィリイは一人天狗の馬鹿者さ。あの氣違ひが頭の鉢を打ち割られて正氣でゐられるわけがねえがな？ おらあ奴等の後を追つかけてつてあの氣ちがひがフィリイに向つて來るところを見物しよう。

(ジミイ出て行く、後家は酒を帳場の後へ隠す。家の外騒がしくなる)

聲々。そら來た！ 駆けつぐらの名人！ 飛びつぐらの名人！ 好いわけえ衆だ！ はしつこいやつだ！ そら、連れてけ！

(クリステ騎手の服装にて入り来る、ペギイン、セイラその他の娘たち及び男たち一緒に入り来る)

ペギイン。(群衆に)さあもう此人の邪魔をしないで歸つておくれ、此人は汗でづ

ぶ濡れになつてるんだから。ほんとに、行つとくれ、そして此人が汗を乾かす間、綱つ引きでもやつてゐておくれ。

群衆。此處に御ほうびがあるぜ！ 風笛と！ 此胡弓はひかし或詩人が弾いた

ものだ！ それから、此平つたい三本刺のあるブラクソンの杖はダブリンの市から學生さんを叩き出しさうな品だ！

クリステ。(一同より賞をうけ取る)みなさん、ありがと。だが、みなさんもわしが過日あの一と打ちぶち下ろすところを見たつたら、今日の事なんざつまらねえことだといひなさるだろ。

村の口上いひ。(外にて鈴を鳴らす)とうざい、とうざい、今日最終の番組！ 下の原で綱つびきが始まりまわす！ みなさん、お寄り下さあい！ メヨの衆のお手柄を願ひまわす！

ペギイン。さあ行つて、此人に汗を拭いたり休ませたりしてやつておくれ。ほんとに、もう行つとくれ、もう此人はこれつ切り何もしやしないから。

(彼女見物を外に押し出す、後家クインも彼等と一緒に出て行く)

人々。(出て行きながら)さあ、行かう。ひと先づさよならだ!

ペギイン。(自分の肩掛けてクリステの顔を拭いてやり、うれしそうに)ほんとに、お前は好い子だよ、お前これからはお得意だろ、これだけの賞品が貰へるのだから、まつびるまの暑さで大汗になつてゐる!

クリステ。(嬉しそうに彼女を見る)もし俺が今欲しいと思つてる賞品が貰へれば、それこそ俺は大得意だ。そりやほかでもねえ、公許が出たら、二週間以内に俺と夫婦になるつていふ約束だ。

ペギイン。(彼から後へさがる)あたしにさういふことをいひ出すとはお前も豪勢だ

ね、みんながいつてるわ、もう四月か五月も立つてお前のお父さんが腐つてしまつた時分になれば、お前は生れ故郷の何處かの女の許へ歸つて行くんだらうつて。

クリステ。(怒つたやうに)お前を離れてか?(彼女につめよせる)俺は決して何處へも行かない。四月も五月も立つて時候が温かくなる時分には、お前と俺と夜露に濡れてナイフィンあたりを歩いてるだらう、丁度その時分は、草に好い匂ひがして、小つちやいびか〜の三日月さんが山に沈んで行くのが見えるだろ。

ペギイン。(擲論ふやうに彼を見て)クリステ・マホン、お前それぢやナイフィンの川べりで、日がくれたら、密獵人の戀の真似でもするつもり?

クリステ。俺の戀が密獵人の戀だらうが、伯爵さんの戀だらうが、そんなこと



はどうでもよかる、俺の両手がお前を抱いて、お前のつぼめた唇に俺が接吻を押つつける、そしたら、ひかしも今も一人ぼつちで金の椅子に寂しく坐つてゐなざる神様をお氣の毒だと思ふかも知れねえ。

ペギイン。おもしろいだらうねえ、ほんとに、どんな女がどんなに思つたつて願つたつて、お前のやうな口のうまい話のうまい若い衆に會ふことはむづかしかる。

クリステ。(得意になつて)まわ待つて見な、二人でエリスあたりで路に迷つて、丁度グードフライデの時分、そこいらの井戸から水を飲んで、二人の濡れた唇で強いキッスをやつて見たり、頸飾りのやうな草の花の中に、お前の身體を仰向けに寝せて、日なたに日なたぼつこしながらでも、俺の話聞くがい、。ペギイン、(彼の調子に動かされて、低い聲で) そしたら、あたしは美しく見えるかし

ら？

クリステ。(歡喜を以て)もしさういふ時に冠をつけた僧正さんたちがお前を見たら、トロイのヘレン姫が後光のさした肩掛に花束をさして、そとをあつちこつち歩いてるところを、極樂の横木を押し曲げてのぞき見するお聖人の豫言者様のやうな真似でもするだらう。

ペギイン。(心からの優しみを以て)それでも、クリステ・マホン、あたしに何のいゝところがあつて、詩人のやうな話上手な、そして勇ましい心のお前に、あたしを好いつり合ひの相手だと思つてくれるの？

クリステ。(低い聲で)お前一人の心に七つの天の光明がある。これからは、お前は俺のために天人の燈火のやうに、俺がまつくらやみに外に出て、オーエンやカロモアで蛙を突つ刺してゐる時にも、俺を照らしてくれるだらう。

ペギイン。クリステ・マホン、もしわたしがお前のおかみさんになつたら、さういふ晩にはわたしもお前と一緒に行くわ、わたしは巡査をだまかすことも上手だし、天のお星様にをかしいわだ名をつけることも上手なもの。

クリステ。お前も行くんか？ 電が降つたり、あけ方の霧に會つたら、お前は死んでしまふだろ。

ペギイン。お前とわたしなら、どんな狭い藪にでもやす／＼隠れられるわ。(悉ろしさうな不安を以て) だけれど、あたしたちはたゞ話だけかも知れないわ、お前のやうな立派な若い衆にゐて貰ふのには、こんな貧乏くさい藪屋ぢや駄目かも知れないわ。

クリステ。(彼女を腕に抱く) もし俺がキリスト様の信者でなけりや、お前の家の屋根の一本一本の葉にも、お前の家の入口の小徑に敷いてある石つころの一つ

ふ一つぶにも、おらあお祈りを上げたいくらゐだ。

ペギイン。(悦んで) もしそれがほんとなら、わたしは今日から神様にお蠟燭をあげて此奇蹟のお禮をいはう、お前を南の國から此處までよこして下さるし、あたしは着物がちやあんと買つてあつて、ちつとも待たずに、お前と夫婦になれるんだもの。

クリステ。奇蹟だ、それに違ひない。俺は遠いところで長いこと働いてゐて、それから長いこと歩いて来て、その間にも此嬉しい日にだん／＼近寄つて來ることも知らずにわたんだ。

ペギイン。そしてあたしと來たら、お金の樽の十も持つてゐる猶太人とでも結婚しに海を越えて行かうかと思つたことも度々ある、お前のやうな人が、神様の星のやうに、だん／＼近寄つて來ることは夢にも知らないでわたんだわ。

クリステ。さういふ話を女たちがくだらない野郎に話して聞かせるのをおら長い年月聞いてゐた、お前の聲のやうな聲で此俺を悦ばせる優しいことをいつてくれるのを今日始めて俺は聞くんだ。

ペギン。クリステ・マホン、此あたしがそんな優しい話をするのが不思議だわ、あたしの悪たれと來たら此國中に怖がられてゐたんだのに。ほんとに、人の心は不思議なものだ。今日の今から、メヨの土地に、あたしたちのやうなしやれた戀中は又とあるまい。(酔ひしれた唄の聲家の外に聞える)うちのお父さんがお通夜から歸つて來たんだらう、お父さんが一と眠り寝たら、二人で話して聞かせよう。眠つた後ならおとなしくなつてゐるだらうから。

(二人立ち離れる)

マイケル。(外で唄ふ)

監獄所の番人が

すぐに俺たちをつかまへて、

ケバンの市にもう一度

縄つきにして連れて來た。

(マイケルはシヨオンに扶けられて入り来る)

ふんじばられた俺たちは

泣く泣く牢で寝てしもた……

(彼はクリステを見つめる。近寄つて酔つばらひらしく握手する、ペギンとシヨオンは左手に立つて話し合ふ)

マイケル。(クリステに) あにさん、まづ、くおめでたう。お前が下の砂つ場でどの競争にもみんな勝つたつて話は聞いたよ。なぜ又俺はお前のやうな立派な丈夫らしい若い衆をケート・カシデのお通夜に連れてかなかつたらう、あ

んなに酒のふんだんにあるお通夜つて又とあるめえ、なにしろ、午ひるになつて小つちやい墓に婆さんの骨を埋める段になると、五人の男が、ぢやねえ、六人の男が、墓の石の上に、げろを吐つえてぶつ倒れてしまつたんだからなあ。

クリステ。(ヘギインの方を見ながら、不安らしく)ほんとかい？

マイケル。ほんとだとも。お前も、お前のかはいさうなおやぢどんを人にないしよで埋めつちまふたわ、馬鹿な計畫たくらみをやるぢやねえか、おやぢどんをケリイ馬の轡うしろに載つけて、此西の方へ持つて来りやい、に、むかしのお聖人のヨセフ様のやうなあんばいしきにな、さうすりや俺たちの中で一人前の葬式とらねえもしてやれたのになあ、あんな遠くでくさらしといて、おやぢどんの後生のためにお通夜の酒を飲んでやる人つ子一人ねえぢやねえか？

クリステ。(不愛想に)あ、いふやつは、あ、やつて埋めときや澤山だ。

マイケル。(クリステの背中を叩いて)これさ、お前は情のねえ人殺し野郎だなあ？

お前が女房を喚こゑぎあて、行つた家の男は災難わざはひだなあ。(シヨオンを指して)俺の娘の婿むこに選んだあのはにかみやの生真面目な男を見てくれ、今日二人を夫婦にするちう金びかのお許し状も貰つて来たんだ。

クリステ。それで今日二人を婚禮とらねえさせるんか？

マイケル。(威張り返つて)さうよ。俺がどんなにへられけになつてたところで、自分の娘むすめを獨身ひとりみでお前のやうなふざけもの、悪漢わるものと一緒に置いとくと思ふのか？

ペギイン。(シヨオンから急ぎ離れて)お許しが来たつて、ほんと？

マイケル。(不得意に)ライリイ和尚様おんがみがしちめんどくせえラテン語で讀んで下さつて、まづ間に合つてよかつた。わしは大急ぎで二人をめあはせよう、あの

若い男が邪魔に這入ると大變だから」つていひなすつた。

ペギイン。(激しく)間に合はないでおあいにくさま、あたしがこれから夫婦にならうつていのは、此人さ、此クリステ・マホンだよ。

マイケル。(恐ろしきうに、大聲で)お前この男を俺の息子にする氣か？ おやぢの血で濡れてそれつきり乾しかためた此奴を？

ペギイン。さうだよ。女の身でシヨンちゃんやんのやうな人と夫婦になるのはつらいだらぢやないか、まるで案山子のやうなうすのろい人間で、強くもなけりや、はなしも下手な？

マイケル。(大息をついて椅子に沈み込む)あ、手前は不孝娘だ、俺の心の脂肪をかき廻しやがる、おらあ斯んなに酒びたりのどろんこになつてるところぢやねえかお前のおかげでやつらが俺にけれこれいつて來たら、俺は日がな夜どほし胸

の中に風を吹つ通して怒鳴つてゐなくちやなるめえ？ ショオンや、お前何とか好い智慧はねえか？ ちつともやきもちを焼く氣はねえんか？

ショオン。(ひどく悲憤して)おらあおやぢを殺した男をやくのはおつかねえや。

ペギイン。ほんとに、お前なんぞと夫婦になつちやたまらないわ、母のない子にはいろんなあふない事があるわねえ、此人が西からだか南からだか此處までやつて來ない前に、あたしがお前と夫婦になつちまはなかつたのは、なんて合せなんだらう。

ショオン。天下の往來からうすぎたない宿なし野郎を拾ひ上げるてえのは變つた話さ。

ペギイン。(馬鹿にするやうに)それでお前、自分のことを、春のお天氣の好い日曜に女と一緒にぶらつくのに相當した色男だと思つてるのかい？ お前はつれ

の女に、百合の花や薔薇の代りに牛の肝臓の話でもするだらう？

シヨオン。ぢやあ、お前は俺がどれほどお前を思つてるんか考へてくれねえんか、おわりがたいお許しも、俺がみやげにしようといふ澤山の牝犢も、金の指環のことも考へてくれねえんか？

ペギイン。キラキインのシヨオン・ケオさん、お前さんはわたしには勿體なすぎるわ、お前さんは何處かそこいらへ行つて、ミイスの野原に一杯になるほどの牛を持つてるやうな、そしてバロのお母さんの飾りのダイヤモンドでめちやくちやに飾り立ててるやうな立派な奥さんを探しなさい。シヨンちゃん、お前にはそれが相當だよ。それぢや御機嫌よう！ (彼女クリステの後に退く)

シヨオン。聞いてくれねえかその俺の……

クリステ。(恐ろしい毒舌で)あにさん、ひつこんでゐなさい、さうでないとおらあ

今日もまた人殺しをやるかも知れねえ。

マイケル。(絶叫して立ち上がる)人殺しだと？ お前氣がふれてるんか？ 今夜の

御馳走の酒が一杯に並んでる此處で人殺しをやらうつてんか？ 喧嘩がしたけりや、海岸へ出て行け、潮があげてくりや、どんな痕跡だつて人目に觸れねえやうに洗ひ流しちまふ。

(シヨオンをクリステの方に押し出す)

シヨオン。(身を振り放して、マイケルの後に隠れて) マイケルさん、おらあ此奴と喧嘩はやんねえ。斯んな何處から降つて来たか分かんねえやうな野蠻人に手向ふよりは、おらあ一生死ぬまで戀にくすぶりながら獨身でくらす方がましだ。マイケルさん、お前自分で掛かつて見な、それでなきや、俺の牝犢だのヌニームの青牛だのをお前損することになるぜ。

マイケル。俺に喧嘩しろといふのか、彼奴はおやぢ殺しをするやうに出来上がつてる奴ぢやねえか？ (シヨオンを押し戻す) それ、馬鹿だな、やつつけちまへよ。

シヨオン。(少し進む) 手で打たうか？

マイケル。お前の西つ側の鋤を取れよ。

シヨオン。もしこれで打つたら、おらわ絞罪が恐ろしいや。

クリステ。(鋤を取り上げる) それぢや俺がお前を是非とも絞罪にさせてやる、それとも此處を出て行くか。

(シヨオン月口から逃げ去る)

クリステ。それでは、あばよだ。(マイケルの許に行き、なだめる調子で) お前もあんな意氣地なしの奴を自分の家へ置いとさ度かあないだらう。さあどうか承知し

て、あの娘が俺と口約束するのを聞いてくんな、おらわ好運の星の潮時に乗り合せてゐるんだから、俺を此處の家に置いといて損はないよ。

ペギイン。(マイケルの他の側に立つて) さあ承知して下さいよ、あたしほんとに此人と夫婦になつて、決して後悔しない積りだから。

マイケル。(真中に立つ立ち雙方につきまわりながら) 俺が思ふに、人間がらくな死に様をするのも苦しい死に様をするのも、そりや神の御心だ、何にしても人間は澤山の子孫を生み殖して此世界が成り立つやうにしてやるのが神の御心だ。獨身者が他人の家で何か食つて、又ほかの家で一杯飲んで、岩の上で迷ひ子になつた老年のねぼけ驢馬みてえに、自分の家といふものがなかつたらどうなるべえ？ (クリステにいふ) お前のやうな人間を自分の家へひつぱり込んだら自分たちがいつ何時殺されるかも知れねえといつて、世間のやつらはおつか

ながるかも知れぬえが、おらわ愛蘭の男一疋だ、不時に死んだつておらわ平氣だぞ、お前がシヨオン・ケオと一緒になつてひねつこびた厄介者を澤山生み出して俺の床の廻りを賑やかにしてくれるよりは、ちつちやい勇ましい悪たれの子の孫をうんと澤山育てくん。〔兩人の手をつなぐ〕強い男は天下の寶だ、おやぢの眞つ向を一打ちでぶち割つた人間は十人前の勇氣があるわけだ、神様もマリヤ様も聖バトリック様もお前たちを祝つて下さつて、今日から繁盛さして下さるやうにお願い申す。

クリステとペギイン。アーメン！

〔家の外に騒動。老マホン駆け込む、凡ての群衆及びクイン後家續いて入る、老マホンはクリステに突つかかり、彼を打ち倒して、打ち始める〕

ペギイン、〔マホンの手を押へて〕お待ち、これ？ お前はぜんたい何者だい？

マホン。やつのおやぢだ。

ペギイン。〔身を引つ込めて〕死んだ人が生き返つて来たの？

マホン。鋤の一打ちぐれえで此おらが直ぐおつ死ねると思ふか？ 〔再びクリステを打つ〕

ペギイン。〔クリステをにらみつけて〕お前は嘘をついたんだね、お父さんを打ち割つたなんていつて、どうもしもしないくせに。

クリステ。〔マホンの杖を押へて〕こりや俺のおやぢぢやない。こりやめつちやくちやの氣違ひで世間を騒がす奴だ。〔後家指して〕あの人だつて知つてゐる。

群衆。貴様はペギインを騙すんだな。クインさんは今日此の男を見たんだ、それを貴様が知つてたんだらう！ うそつきめ！

クリステ。〔ぼんやりと〕こいつこそ嘘つきだ、頭を打ち割られて倒れてゐて、死



んだと見せかけやつて。

マホン。おらあ手前が俺に手向ひしたんでおつたまげて一ト息ついてる間に手前は山を駆け下りてつたぢやねえか？

ペギイン。それをあたしたちは此奴をゑらものにしてゐたんだ、こいつはなんにもしないでそうつと一ト打ちぶつて大汗になつて北の方に逃げてつたんださつさと此處を出ておくれ。

クリステ。(あはれつぽく) お前も今日俺がしたことを見たぢやないか、此ぢ、いの手から俺を助けてくれ。何もそんな泡をくつて俺をおつぱり出さずともいぢぢやないか？

ペギイン。そりやお前の不實のせいさ、此三十分ばかり前にあたしの心の心底から思つてゐたのがお前かと思ふとあたしや腹が立つ。(マホンに向つて) どうぞ

此處から此男を連れてつておくれ、あたしが大嘘つきの馬鹿者に怒りつけてるところを世間に見られるのはいやだから。

マホン。さあ、さつさと罰を受けるだ、俺と一緒に来るだ。

群衆。(嘲笑する) いたづらものだなあ！ メヨの仲間の首領になる若い衆かと思つたに！ をぢさん、いぢめてやんなよ。

クリステ。(おどろした恐怖を以つて立ち上がる) なにしにお前たちは俺をいぢめるんだ、おらあ神の力の雷様に打たれてもい、もしあの一と打ちよりほかに、ちつとでも誰かに悪いことをやつたといふんなら。

マホン。(聲高く) もし、やつたことがねえといふんなら、手前はやくざ野郎だ。

此世界中の罪惡もみんな手前のやうな奴が行るんだ。

クリステ。(兩手を上げて) 神様の名にかけて……

マホン。神様を引き合ひに出さずと置け。それとも、神様に頼んで早魃ひでりだの、熱病だの、流行病はやりやめえだの、コレラだの呼び下さうてえんか？

クリステ。(クイン後家に) お前が中に這入つてなんとか俺を助けてくれないか？  
後家。わたしも随分骨を折つたんだよ、實をいふと。もうどうにもならないわ。  
クリステ。(絶望して周囲を見廻す) ぢや俺はもう一遍あの責苦せつくの中へ歸らなけりやならねえんか、それとも、此處を逃げて、八月のどみつぼこりどみつぼこりで咽喉の孔あなに土塊どろつこを拵こへたり、三月の風に吹かれて肋骨おほらねを笛ふみたいいにヒユヒユウいはせて、國中を乞食のやうにはうつき歩くか？

セイラ。ペギちゃんに助けてお貰ひよ。あ、いふ人はちよいちよい氣が變るから。

クリステ。おら、いやだ。あの美しいのもくるしみの種だ、キイルの草はむつ原はらを南に向いて行つたら、夜中のお月様もあの人の顔が見たかる。俺はあの人の前に這ひずり出てあの燃えるやうな眼でこの心を焼きたいとは思はない。

ペギイン。(泣き出したいのを堪へて、マホンに向つて手強くいふ) 此處から連れ出しとくれ、それでなけりやわたしは若い人たちに頼んでひどい目に會はさせるから。

マホン。(杖を振ひながら、クリステに) 此處の衆になぐられ度くなさや、さあ來ら。

ペギイン。(泣きわらひする) さうだよ、此奴こいつがお仕置しやきされるのが評判になるだらう、英雄みらものに見せかけた大嘘つき、人の嫌はれ者さ。

クリステ。(マホンに向つて) 放さねえか！

群衆。さうださうだ。しつかり、クリステ。あの二人が打ち合ひをおつ始めたら、世界中をひつくら返すだらう。

マホン。(クリステに扼み掛つて) 来いといつたら。

クリステ。(前よりも威嚇的に) 放せといつてるんだ。

マホン。手前の足がびつこになつて、手前の背中が眞青になつてから、放してやる。

群衆。雙方とも、しつかりしろ。おらお爺さんの味方だ。それ、おにや、しつかり。

クリステ。(低い痛切なる調子で) 騒ぐなお止めろい、お前たちや、さつき此俺を嘘のおかげで英雄にしてくれたが、今度は又、いゝことを教へてくれた、孤獨であるのはみぢめなもんだが、天下の馬鹿者連と一緒になるよりや、まあだまじだよ。

(マホン彼の方に進まうとする)

クリステ。(殆ど叫ぶが如く) 離れておねえか……さうでないとおらお雲の上の守護本尊の天人たちをまばたきさせるやうな打ち方をみんなに見せてやる。

(クリステ不意にすばやく動作を以て身を振り向けて勦を取り上げる)

群衆。(面白いのと恐ろしいのと入れ交ぜの氣持で) 氣が觸れたぞ! みんな用心しろ!

馬鹿から逃げる!

クリステ。俺が馬鹿かな、今日俺は都會の詩人の前髪の毛をおつ立てさせさうなうまい言を自分の聲で並べ立てた覺えがある。俺はお前たちの驅けつくりにも飛びつくりにも勝つたぞ、それから……

マホン。無駄口をた、かずと、おらと來う。

クリステ。行くとも、だが、おらお先づお前をぶつ倒すぞ。

(クリステ勦を以てマホンに飛びかかり、戸口から追ひ出ず、群衆及びクイン後家續いて出る。家

の外に大騒動あり、次いでうなり聲、暫時死の如き沈黙。クリステ入り来る、眼が眩んだ如く火の側に行く。

後家。(火急ぎで入り来り、彼の側に行く)みんながお前に向つて来るよ。さあお逃げ、でないよ、ほんとに、お前絞罪だよ。

クリステ。斯うなりや、ペギインは先刻と同じやうにはめてくれるだらうと、俺は思つてる。

後家。(じれつたさうに)うら口からお出。わたしはお前が首つく、りの木の上で息を引き取るのはかはいさうだと思ふから。

クリステ。(怒つて)いやだ、俺ら。ペギインと別れて俺の一生は何が面白かる? 後家。おいでといつたらさ、それだつてお前、昨夜とおんなじ身の上ぢやないか。今度は二度目の人殺しを女たちに聞かせて歩けばいいだらう。

クリステ。おらペギインと離れない。

後家。(じれつたさうに)ピンガム村からミススの原まで、どんな村の店にだつてあんな娘はいくらもゐるだらう? さあおいで、わたしはお前にもつとずうつと好い戀人を月の變り目毎に世話して上げる。

クリステ。俺が思つてるのはペギインばかりだ、お前がどんな選り抜きを女を大勢連れて来てくれて、その女たちが襦袢一枚でおつ立つて、此處の家から東の國まで並んだところで、おらわ用はねえ。

セイラ。(自分の下着を引きはづしながら驅け入る)みんなが此人を絞罪にする氣らしいよ。(自分の下着と肩掛を後家に差出す)これを着せてやつとくれ、そして東の方へ逃がしておやりよ。

後家。いま、氣がどうかしてゐるらしいの。でも、わたしたち二人で着せてや

らう、そして渡しまで連れてつて小船に載せてやらう。

クリステ。(力なく争ふ) よしてくれ、これ？ 俺は今日の自分の好运しんばいを考へてるんだ、きつとあの女は女房になつてくれる、そして俺はやつぱり折紙つきの英雄英雄なんだ。

後家。此人の左の手をおつかまへ、二人でひつばつて行かう。にいさん、おいでつたら。

クリステ。(不意に立ち上がる) あの女から俺を離さうてえんか？ あの女と俺と夫婦になるのをお前たちはやくんだな？ さつさと歸つてくれ。

(彼は腰掛を取り上げて兩人を嚇す)

後家。(立ち去らうとして) 此人は牢屋に入れるよりは氣違ひ病院に入れるがいゝんだよ。わたしたちは裏口から行つてお醫者と呼んで來よう。さうでもして助

けてやらう。

(後家はセイヲを連れて奥の戸口から出て行く。群衆表の戸口に群れて立つ。クリステ再び火の側に腰かける)

マイケル。(恐ろしさうに囁く) 爺ぢいさんはほんとに殺されたんか？

フィリイ。最後しめえの息を引き取るところをおらわ聞いたんだ。

(一同クリステなのぞき見する)

マイケル。(繩を持って) あの様子を見な。絞刑吏くびつくりやのやるやうな輪をむすんどいて彼奴あいつがうつかりしてゐる内に、あの頭の上からおつばめるがいゝ。

フィリイ。シヨオンや。お前やつてくれ。此處にゐる人間の中ぢやお前が一番正氣しんきだからな。

シヨオン。おいらが側へ行くんか？ あいつは俺を一番憎らしがつてるぢやね

えか？ ペギン、お前やれよ。  
ペギン。それぢや、おいで。

(彼女他の連中と進む、一同してクリステの頭から二重に絡んだ繩をかぶせる)

クリステ。なんだい？

シヨオン。(一同クリステの腕に固く繩を締めつけながら、勝ち誇って) 巡査<sup>おまはり</sup>んところへ行くだ、

お前ももう往生するだ。

クリステ。俺がか？

マイケル。もし俺たちがお前を見のがしてやつたら、神様が俺たちに法律<sup>おかしみ</sup>の罰をあてなさるかも知れねえ、だからお前も氣持よく行つてくれ、絞罪<sup>くびつくり</sup>は氣持のいい手つ取り早い死に様だ。

クリステ。おらわ動かない。(ペギンに) 今度はみんなの見てる前でやつつけた

んだ、お前、あれを何と思ふ？

ペギン。わたしは斯う思ふ、知らない人はほらを聞いてれば驚異<sup>めづらしきもの</sup>さ。だけれど、背戸で喧嘩したり鋤で打つたりするのを見ては、人嚇かしのそらつ話と悪い所行<sup>しごと</sup>とは大變な違ひがあるつてことが分かつたよ。(一同に) 此處から連れ出しとくれ、さもないとわたしたち大勢が此奴<sup>こいつ</sup>のした事で調べられるかも知れないよ。

クリステ。(恐怖を帯びた聲で) お前が俺を送り出すんか、角の生えた指の絞罪吏<sup>くびつくりや</sup>に血だらけの繩を俺の耳根つこへ引つ絡めさせるために？

一同。(繩を引く) さあ、來ねえか？

(クリステ床の上に引き倒される)

クリステ。(ティアルの脚に自分の足をひっかけ) ペギン、繩を切つてくれ。おらわ

お前たちん許とこから出て行つて、今日けふからは、キイルの狂人まじがひみたいのに、岩にこびりついた濕糞ぬるくそだの青い草だの食つてくらさう。

ペギイン。そしてお前のやうな憎らしい嘘つきのために、わたしたちが代りに絞罪くびになるのかえ？ (一同に連れてつとくれ、此處に置かずと。

シヨオン。首根つこの結びをひつばつて、うんとしめろ。

フィリイ。お前自分で締めるがいゝぜ。どうもしやしねえ、食ひつかれねえやうに離れて掛りや大丈夫だ。

シヨオン。おつかねえなわ。(ペギインに)火のおこつてるやつを一塊ひとつかい持つて來て奴の足をやいてくんねえ。

ペギイン。(ふいごで火を吹きおこす)さわ、お前いゝ加減にお放し、それでないと、向う脛を焼くよ。

クリステ。俺を責めようと思つて火を吹いてるんか。(クリステの聲高くなり強くなる)お前たちはさういふ奴等か？ なら、みんな用心しろ、どうせ絞罪くびになるんなら、賑やかに送つて貰はう、死ぬ前にお前たちの血も流してやる。

シヨオン。(ちりみ上がつて)フィリイさん、しつかり持つてくんな。ほんとに、しつかり頼むよ。きつと彼奴あいつは此俺こいつに復讐しゅうをしようてんだ。

クリステ。(殆ど愉快さうに)もし俺が手前たちを捕まへたら、今日の日の晩方には手前たちは地獄の鳥に見せる案山子のやうにぶらさがつてゐるだらう。へん、手前たちは俺のおやぢの幽霊と一緒に地獄の國境でも通つて恐ろしい旅でもするがいゝ。

シヨオン。(ペギインに)早くしねえか？ あゝ、おつかねえ奴だ。ライリイ和尚様が酒を飲むなわ罪だといひなさるが、眞理まことだなわ、お前たちは今みんな震

へてがたついてゐるぢやねえか？

クリステ。もし俺が手前たちの中の誰かの首をひねつてやれたら、おらわ裁判所でびく／＼もの、陪審官達の前で立派な裁判を受けてやる。俺が繩にぶらさがつて死ぬ日には、メヨの土地でみんなが泣くだろ、絹や縴子の着物を着た奥さん衆がレイスのハンケチで涙を拭いて、俺の恐ろしい死様しさまを歌や小唄に唄つてくれるだらう。

(クリステ床の上を跳き廻つてシヨオンの足を咬む)

シヨオン。(叫ぶ) 足を咬まれたわ。やま犬みてえな奴だから、おらわ死んじまらう。

クリステ。(自分の仕事に満足して) おう、死んじまへ、二週間か三週間も立つて俺が行く時、地獄の國旗を振つて迎へに出て来い、悪魔だつてケリイやメヨで

親を殺した奴をさう澤山は知るめえから。

(老マホン後の方から四ツん這ひになり入り来て、様子を見てゐる、一同氣が付かない)

一同。(メギインに) 火を持つて来てくれ、よう。

ペギイン。(進んで来る) さあ、觀念おし。(彼の足を焼く)

クリステ。(蹴たり叫んだりする) あゝ、助けてくれえ！

(クリステ蹴つてテーブルから離れる、一同彼を戸口にひきずり行く)

ジミイ。(老マホンをみつけて) みんな見る、なんだか這入へいつて来たぞ？

(一同クリステを手放して左手に逃げる)

クリステ。(膝を立て、マホンと顔を見合せる) 三遍殺されにやつて来たんか、それとも

何かのぞみがあるんか？

マホン。やつらは何だつてお前を縛つた？



クリステ。俺がお前を殺したんで絞罪にするつて巡査んとこへ俺を連れてくことだ。

マイケル。(あやまるやうな調子で) あぶねえ法律の手から自分めい／＼の小さい家を守つて行くのが天の心だ、わしが店をつぶされたり絞罪になつたりしたらわしの娘はどうなるだらう？

マホン。(クリステの繩を解きながら、にがり切つて) お前があゝの娘の背なかに袋をしよはせて、一生死ぬまで海扇の殻を拾はせたとこで、そりやお前の勝手だ。だが、おらとおらが伴は俺たちの勝手な方へ行く、これからはわ、メヨの土地の悪黨共と馬鹿者共の話を一同に聞かせるで面白かんべ。(自由になつたクリステに) さあ来う。

クリステ。お前と行くんか？ ぢやあ、強い大將が野蠻人の奴隷と行くやうに

俺は行く。さあ来う、今日から俺はお前に俺の朝飯の煮たきもさせたり、俺の鍬も洗はせてやる、これからはどんな喧嘩も俺が勝ちだ。(マホンを押し出して) 出かけろと、いつてるに。

マホン。俺にいつてるんか？

クリステ。ぐづ／＼いふない。さあ出るんだ。

マホン。(出ようとして肩越しに振り返つてクリステをみる) すてきだなあ！ (にや／＼笑つて) おらあ又氣が觸れた。(出て行く)

クリステ。おらあ此處の衆に千萬遍も禮をいふ。お前たちのおかげで俺も一人前の野郎になれた、今日から最後の日の朝まで、おらあ面白をかしく陽氣に一生くらすんだ。(出て行く)

マイケル。まづ、ありがてえ、これでゆつくり酒が飲める。ペギイン、お前、

樽をわけねえか？

シヨオン。(ヘギインの側に寄る) やつぱりこれでライワイ和尚様が元どほりわしらを夫婦にして下さることになつたのは奇蹟キジキのやうだな、これで、彼奴カイツの食ひついたきたねえ傷が癒つてくれりや、わしら二人はもうそれで何も案じることはねえだ。

ヘギイン。(平手でシヨオンの耳を打つ) あつちへ行つとくれ。(肩掛けを頭からかぶつて大聲に歎く) あゝ、どうしよう、あたしやほんとにあの人を逃がしちやつた。この西の國一のいたづらものを逃がしちやつた。

(幕)

## 註 解

(1) Playboy (プレイボーイ)の字は一言にして譯しにくい言葉です。極く氣輕な愉快な心を以て世間をおもしろをかしく渡らうといふ若者、いたづらなしながらも、少しも惡氣のないのんきもの、事だと或人から教へられました。女同志の談話中に自分の息子の噂でも出た時に、あれはもう、ほんとのプレイボーイでございます」と母親が謙遜しながら答へる時にも用ゐられるといふことです。坪内先生が「西海岸の悪太郎」とお譯しましたのも此意味からだと思ひます。

然るにもう一つ別説があります。それは愛蘭文學愛好者なる菊池寛氏が大正五年十月の雑誌新潮に「愛蘭劍手引草」といふのを書かれた中に、プレイボーイは最初に「遊戯の選手」といふ意味から出た言葉で、たゞののんきないたづら息子の意味のみの字ではないといつて居られます。菊池氏は Bourgeois のシంగా傳に依つて此説を主張されました。なるほどプレイボーイの一篇中に多少選手の意味も含まれてゐるところを見出します。酒店の窓から二三人でのぞき見するところが若者の近づくを見て、あれがプレイボーイだといふあたりなどは十分に此意味があると思はれます。

併しさうかといつて、これだけの澤山の意味を一度にいひ現はす字を考へ出すことは私如きものには

無理な仕事です。止むを得ず「遊戯兒」といふ字をあてはめまして、それに「いたづらもの」といふふりがなをつけようと思ひました。併し、遊戯といふ字にはいたづらといふ意味は少しもふくまれてゐない。「いたづら」なれば、悪戯とか悪劇とかいふ字でなければあてはまらないといふことを森先生からうけたまはりました。斯うなつて見ますと、悪といふ字は今の場合用ゐる気分になりませんから「いたづらもの」といたすか、「遊戯兒」にプレイボーイとかなをつけるか、どちらかといふ場合になりました。私は當年六十になる自分の母親が此譯を讀んでくれるかも知れないと考へまして、やつぱり「いたづらもの」といたすことにあきらめました。

もつと適當な字がありましたらば、よろこんでいつでも取りかへたいと思ひます。

ついでに、大田黒元雄氏からの手紙を載せます。

………先日おたづねの「プレイボーイ」に就てモリス・ブルジョアの書いて居るところを今のため御目にさげませう。

The word "playboy" (Irish *blanchaill barra*, literally "boy of the game, a term used in the Irish game of "hurling" is Hibernian slang. Its exact meaning not to be found in Wright's English Dialect Dictionary (iv. 543, s. v. "play-boy"), which gives only the older acceptations

of the word: 1. the devil; 2. a playful woman) is "hoaxer, humbugger, mystifier (not imposter), one who does sham things." Mr. William Boyle, the well-known Abbey Theatre playwright, uses the word in this sense in his comedy, *The Eloquent Dempsey*. In Synge's use of it, it seems to have three implicit by-meanings: (a) One who is played with; (b) one who plays like a player (i. e. a comedian and also an athlete or champion: witness the sports in the play); (c) one who is full of the play-spirit: "a wild dare-devil is called a play-boy [as in Synge's well-known comedy]" ("The Irish Dialect of English," by Mary Hayden and Marcus Hartog, *Fortnightly Review*, Apr. 1909. The word, which is half-humorous and half-poetical, is a very rich one and (like "philanderer," which, Mr. Bernard Shaw tells me, has its exact equivalent only in Swedish) is exceedingly difficult to translate.—"The Western World" is the English equivalent of the Gaelic folk-phrase *an domhain shiar*, describing the Atlantic seaboard of Ireland as distinguished from the Dublin side, the *Eastern World*" (an *domhain shoir*).—The whole title seems to echo that of W. H. Maxwell's well-known volume, *Wild Sports of the West* (London. Richard Bentley, 1838), which may have vaguely suggested it.

Maurice Bourgeois: "John Millington Synge and The Irish Theatre," London, Constable, p. 193. *Playboy* の字義に就く語源の扱ひ及び本名を説いたものについては、

P. P. Howe の "J. M. Synge" (Martin Secker, London) Cornelius Weygandt の "Irish Plays

and Playwrights" (Constable, London) Lady Gregory の "Our Irish Theatre" (Putnam, London) Francis Bickley の "J. M. Synge" (Constable's Modern Biography) 等のこれにも發見致されません。けれど要するにあなたの御心配なさるやうに確定的の意味を持つて居るものとは信じ兼ねます。

(2) 原文 "You'd have me crossing backward through the Stooks of the Dead Women……" とあります。"Stooks of the Dead Women" 或場所の名と見えます。"Stooks" といふ字は、束、禾堆などの譯があります。死んだ女のみだれた髪の毛のたばねなどを想像して、何處かの草原が藪のやうな場所にさういふ恐ろしい名をつけたのだらうと思はれます。今、軽く「死人の原」といたしました。が、もつと好い名がほしいと思ひます。

(3) 原文、"bona fide" 普通は「善意に」といふ意味。愛蘭では、日曜日には或る一定の時間のほか酒類の販賣を禁じてあり、たゞ bona fide の旅行者に對しては、何時いづれの店にても、販賣することゝ許可されてゐる。此 bona fide 旅行者なるものは當日三哩以上を歩行し來りたる者ないふ由、日曜には此 bona fide になるために態々三哩以上を歩いて外の村の酒店に行きて酒をのむ者多しと、以て

は英國大使夫人レテイ、グリーンンの教に依つて知ることが出来ました。それ故此場合には「善意に」の意味のみでなく「三哩以上の旅行者」と解釋して、それから「後家一人はさうでない」といふのは、これは bona fide のほんとの意味にて、この後家だけは眞面目な人間でないといふ意味にからせてあると見てよいだらうと思ひます。併し後家クインの家は此酒店の直き近くらしく、或はもう一つの意味もふくまれてゐるかも知れません。

(4) 原文、"the banhs and the screeching sows" とあり、"banhs" の語は "bonnie" と同じく "sucking pig" 即ち子豚の意味。此字については大分みなさんに御心配をかけました。愛蘭語の辭書から漸く見つけ出しましたから、此處にみなさんにお禮申上げて置きます。

(5) 原文に "the man bit the yellow lady's nostril on the northern shore" とあり、"yellow lady" は、黄ろい婦人では、髪が黄ろいのか、顔が黄ろいのか、それとも着物が黄ろいのか、分かりませんが、着物らくしと思はれますが、髪として見ました。

(6) 原文、"She's above on the cnuceen……" とあり、"cnuceen" の字は私の辭書には見つかりま

せん。只、「knuce」といふ字に、岡、出鼻などの譯があります。「knuce」と「cnuce」は音が通じます。cnu は愛蘭にありふれた形を持つてゐるものとして、平凡な「岡」といふ字をはめて置きました。もし別に意味があるものあらば取りかへたいと思ひます。

(7) 原文、「I wouldn't give a thraeneen for a lad」とあり、「thraeneen」は「traeneen」又は「tra-wneen」と同じ意味と思はれます、あみ棒のやうな長いほぞい草の莖とあります。「そんな奴にはちりつば一つやる氣はない」といふ意味かと思ひます。

(8) 「……sending down draughts, and fevers, and the old hen and the Chociera morbus?」とあります。「old hen」といへば、婆さんといふやうな意味かと思はれますが、此處では熱病やコレラの中に婆さんといふ字を入れることはあまり突飛に考へられます。これはあなたが譯者が女であるためにさう思ふのではないだらうと思ひます。いろ／＼問合せて見ましたが、はつきりいたしません。多分何かの流行病の名前ではあるまいかといふ方がありますので、とにかく、はつきりいたしますまで、流行病といふ字を入れて置きました。みなさんの御教をうかがひたいと思ひます。

この譯は大正四年十月中に始めの一幕を譯しました。その後、雑用の爲にその儘になつて居りました。昨五年の五月中第二幕の半分を譯しました。そしてむづかしいので困つて居ります内に、一度御覽を願ひたいとかれて、から思つて居りました上田先生が突然おなくなりになりましたので、私はがっかりしてそれつきり譯を止めてしまひました。昨年十月ふとしたはずみから、シンクの作はシンクを受する自分がせめて此一篇だけでもどうにかして譯して置きたいと再び思ひ始めました。そして今年の一月中旬第二幕の中途から始めまして二月半ばに漸く全篇を譯し終りました。

譯し終りました時に、豫想外のよろこびが私を待つてゐました。それは、坪内先生が私のために序文をお書き下さることを御承知下すつたこととでございます。私のためには眞に身にあまる光榮でございます。家庭に老いたる一女學生の遊戯仕事も、先生の序文をいただいで始めて意義あるものとなつたやうな氣持がいたします。この事に就いては佐々木先生も私のために一方ならずおよろこび下さいました。

此譯には私が十年在住の大森池上あたりの極く東京に近い田舎言葉を用ゐました。それ以外の田舎の風俗言語等は私はあまり悉しく知らないのでございます。

譯し始めます前には、自分の如く都市を離れた田舎すまゐる者にして始めて此書を譯すべきである

と思つたのでした。併し譯しかけて見まして始めて自分はたゞ名ばかりの田舎者であつて、此書を譯す何の権利もないほんとの東京ものであるといふことを悟りました。

此劇がアメイ座の人々に依つて舞臺に演ぜられたのを見物された人のはなしに、一句一句も詩の如く音楽の如く美しく耳に響いたといふことでした。私は自分の譯をくり返して見て、詩のほびも音楽の響きもなく、たゞやつとのことの意味のみを譯し得たに過ぎないといふことを恥ぢます。併し作者の靈は私の深い愛慕の念を知つて、此作を汚した私の罪を恕してくれること、信じます。

此書が再び譯し出されます時には、その譯者は眞の田舎者であつて、同時に詩人であつて、そして言葉の音調を解し得る人であつてほしいと思ひます。さういふ翻譯者が眞に正しく此書を譯し出す日は私はシングのために切に待ちます。

此譯が出来ましたにつけても、まづ鈴木大拙氏夫人の御厚意をお禮申さなければなりません。私が愛蘭文學を愛するやうになりましたのも全く夫人のおみちびきに依ります。此譯についても御親切に御心配下さいました。

昨年、夫人が母君御病氣のため一時御歸國なされました時、私は又あらたに解らないところを見つけ出して困つて居りましたところ、伯爵林博太郎さんの御紹介に依り、米國人タムソン令嬢の許に二

度ほど御相談にまゐりました。タムソン令嬢は、自分は愛蘭人でないので正確なことが解らないからといはれて、御親切にも英國大使夫人レディ・グリーンに御相談下さいました。私は、愛蘭に生れて愛蘭文學を愛するグリーン夫人の如き貴婦人のお助けをはずかしくも得ることが出来ました自分の好運を深くよろこんで居ります。みな様の御厚意をあつくお禮申します。

最後に、大田黒元雄氏が装幀その他萬事につけて御親切なお心添へをたまはりましたことを深く謝します。

大正六年四月

大森に於て

譯者

大正六年五月三十一日印刷  
大正六年六月三日發行

のもらづたい  
附 奥  
製 複 許 不

編輯者兼  
行輯者兼

東京市本郷區森川町一番地  
岡田三鈴

印刷者

東京市芝區愛宕町三丁目二番地  
倉谷鎮夫

印刷所

東京市芝區愛宕町三丁目二番地  
東洋印刷株式會社

發賣所

東京市神田區表神保町三番地  
東京堂書店

定價金八拾錢

001  
234



終

